

黄土高原をゆく ハグ道



ながたかずひさ

【もくじ】

- はじまりはいつも銃
- ステンバーイ
- 一五日
- 白い北京
- 電動人力車とチャイナドレス
- 一六日
- 榆林
- 朱先生
- 楊家溝
- 小麦食うぞ
- 竜王廟
- 一七日
- 緑化するぞ
- 石炭街道
- 一八日
- 山の上の葬送

●ハバブレーク

●寨子

■一九日

●再要塞

●流れに乗る

●ヤンガー

■二〇日

●もう食べられない

●百鬼夜行

■二一日

●北京点描

●ダック&ワイン

■二二日

●鳴呼懷かしのKIX

●あとがき

■おくづけ

■はじまりはいつも銃

きつかけは深尾葉子先生（大阪大学・得意は中国と里山）を高槻から泉州は桃山学院大学まで送迎するという謎ミッショソンが発生したこと、無事終えますと安富歩先生（東京大学・二代目トンチ博士）が待ち構えていて「塩粒を撃ちだす」メリケン製おもちゃのマシンガンを振り回す、のみでは飽きたらず実射しまくりながら

「これで黄土高原で蝶を墜とすんです！」

とお叫びになる。それって次元大介（@ルパン三世）でも結構難しいんじゃないかなと思いつつ「ああマンガ・アニメでよく出てくる変態教授つてホントに居るんだ」とほっこりしていますとその銃を僕に向けながら、

「来ます？」

はいと言わざるを得ない。

なんといつても「黄土高原」などと言いますと中国の田舎も田舎、『西遊記』や『水滸伝』の世界です。

ですか？

いや現代でも『世界ウルルン滞在記』の舞台になりそうな秘境ではないですか。そんな経験、大部屋俳優か臺の立つたアイドルにでもならなければできないものだと諦めていましたものでござ渡りにショットガン。こう見えましても小生、売文商売も些か商つておりますから「秘境帰り」といえば箱がつくではないですか。北京上海なら金さえ出せばJ A LパックでもJ T Bでもなんとかしてくれそうですがここはひとつ学術調査という奴に

「……先生方行く目的はなんですか？」

「里帰りみたいな」「うまいもん喰いに！」

「はあ」

今ひとつ要領を得ない。

が、行つて帰つたあとではよくわかります。

素敵な旅でした、どれくらい魅力をお伝えできるかはわかりませんが、どうぞ一席お付き合いの程を。

■スティンバーイ

ということで日程やチケットは全部深尾先生におまかせして僕はポケーツと出発の日を待つばかり、下調べなんか Wikipedia 様に丸投げさ。

『黄土高原は、中国を流れる黄河の上流および中流域に広がるでつかい高原。』

オッケーイ！

ちょうどたまたま友人の博士、こいつがまた三八で国立大の教授（しかも数学）に抜擢されるというイカれた野郎で、世界を飛び回りマイル余つてしようがない、その彼とあとフロリダに一〇年住んでた小児科のドクターとで呑む機会があつたので訊いた。

「今度中国行くんだけど何か持つてつた方が」

「ムワアスク！」

懐かしいジム・キャリーの顔芸付き。

「あのな半端やないから。サージカルの医療用のN95とかN99とか」

「マジすか」

「一箱。あと得体のしれない店で飯食う時に食器を拭くための除菌ティッシュ。ちゃんと『除

菌』て書いてるのじやなきやダメよ、ただのウエットティッシュじやダメだから！」

「日本が潔癖になりすぎてるのそれとも向こうが魔境なの」

「どつちも」

ということで慌てて近所のドラッグストアに走るとまあこのご時世ですからマスクはなんぼでもあるのですが、除菌ティッシュが意外と見つからなかつたですね。いやあるんですけどあのプラスチックのでかい簡に入つたハンドリングの悪いのとか……結局ローソンで買いました。

僕ローソンで物買うの嫌いなんですよ、一〇〇%

「ポイントカードはお餅ですか？」

つて聞かれるでしょう。僕お餅は生命の危機を感じるのであまり好きじやないんです。正月のお雑煮にも入れないでつて言うぐらい。

さて日程がメールで来ますと八月一五日から一二日までの八日間。最初と最後は北京泊で最後の前が夜行列車車中泊、現地四泊のたっぷりスケジュールです。

さすがにそんなに余裕があると調査研究のある先生方はともかく僕は暇になるかと思い、文庫本、CD、携帯ゲーム機の三大暇つぶしひツズを脳裏に思い描いてハッと

「iPhoneあるやん」

と気づいて、なんだかいい時代なのかそうでもないのかわからないですね。

よく欧洲へ旅行に行く友人は最早（セルラー付き）iPad無しでは行けないと言います、スマホでもいいのですが、大きな画面でGoogleマップで日本語で読めるのがでつかいんですよね。そういえば最近日本に来られる外国人観光客の方もよくタブレットをお持ちです。彼らはあんまりこだわりないのかそのまま写真撮影までされてる姿よく見ますね。

てな」とでiPhoneどうやつたら使えるのか調べました。

ウチauなんんですけど、どうやら通話はそのままローミングしてくれて使えるみたいです。ちょっと料金が高いみたいですが、まあほとんど使わないだろうし。

問題はデータ通信、つまり一般的にいうところの「インターネット」なんですが、これが「データローミングエリアなら」二九八〇円／日とのことで中国はエリアに入つてますのでつまり一日三千円払うと繋がりますよ、と。

「」で初めて海外飛び回る人達が「SIMフリーiPhone」を欲しがる理由がやつとわかりました。さつと調べたところ現地でSIM買つて挿した方がはるつかに安いですね。

こういうのつて「旅慣れた」「ガジェット好き」に聞くのが一番手つ取り早いのですが、僕の周りには「どちらか」の人しかおらず、いや、一人居るのは居るのですがこの人が王道は決して歩まずSONYのイギリスで売つてる日本で売つてないちつこいスマホとか使いこなして悦ぶヘン

タいや上級者で……デイトレーダーでもないのに液晶九枚前にして仕事してゐる人です。

保険も掛けました。最近はもうネットで通販で決済カードで手元でプリントアウトしたのが証書になるというお手軽さ。

おすすめプラン八日間で三四七〇円でした。ちなみに損保ジャパン。だいたい大手どこも似た価格になります。

あ、もちろんパスポートの有効期限確認は忘れてませんよ。四年前の僕はもう少し髪があつて

……

衣料は八日分ですが男旅ですし旅先で三ツ星レストランやオペラ鑑賞に行くわけでもなく、出身の中学校が合宿の好きな学校でしょつちゅう行つたのでコンパクト・パッキングはお手の物。ボストン一つとリュック一つにまとめました。

実は地味にこれが役に立ちました。三人で移動する時でも、向こうのタクシーが日本で言うコンパクト級が多くてすぐトランクが一杯になり、よく車室でボストン抱えてました。あれスースケースだつたらどうなつてたことか。

今回のお供のカメラはSONYのRX100です。二八ミリ始まり三倍ズームのコンパクト機ですが、一インチセンサーで画質には定評あり。母が持つてゐるNEX-7（ミラーレス一眼）を借りようかな、とも思ったのですがヘビーな旅になつてカメラに振り回されるのも嫌ですし、黄土高原というからにはきっとサラサラの砂で湾岸戦争の時戦闘ヘリが砂で故障しまくつて俺たち整備兵が苦労させられたようなことにならんとも限らず、コンパクト一台、とiPhone5のカメラで。

結果から言うと借りて持つて行つても良かつたかなあ、という感じです。でも砂で壊れるのは本当らしく、安富先生も壊したことがあるそうです。深尾先生は故障に備えてコンパクト機を何個も持つて行くそうな。旅の途中で知り合つた方も、防水防塵のアウトドアモデル使つてました。砂は本当にパウダー状で、僕は通気性のいいスニーカー履いていつたのですが、毎日足が粉っぽくなつて閉口しました。あまりに細かいのと湿度が低いのでジヤリジヤリして不快つてことは無いのですが、旅行される際は除菌でなくともウエットティッシュをお持ちだと摺ります。

そんな日々を送つていますとこれまで阪大で上田暁亮先生（カオスの発見者ですよ）が講演される際、運転手を仰せつかるという光栄に浴したのですが、懇親会にたまたまカオル君というナイスガイが来られていて彼も黄土高原経験者で、

「何か持つてつた方がいいものありますか」

「夜は寒いので長袖かな」

「中国語とか勉強しました?」

「しようと思つたけどできなかつたよ。でもまあなんとかなる

「ですよねー」

ということで中国語のマスターは早々に諦める。だいたい世界中どこへ行つても
「メシ」「風呂」「お小遣い」

の三つを知つていれば生きていけると名作『スキー・ジャンプ・ペア』で学んだので、それだけ覚
えておこう。

ニーハオ、シェシェ、ザイチエン！

●白い北京

さて出発日。

集合は閔空。早く着いたので「サンマルク」でお茶しようとしたもう国際色豊かで飛び交う言葉も様々です。

合流、チエックイン後「がんこ」でお寿司とおうどんで日本食に別れを告げて、いよいよ出国……の前に出発案内の（おそらく日本人の）中国語がもの凄いらしく両先生ズッコケてました。ま最近、軍人でも非正規労働ですからね、Google翻訳を初音ミクにしゃべらせてないだけまだマシということで……いやそつちの方がマシな時代がすぐ来ますねえ。やっぱり雇用問題の解決にはベーシックインカムしかないんじゃないですかね。

飛行機はChina AirのエアバスA321。アテンダントのサービスは超大雑把で枕と毛布の数が足りないなど、日系企業慣れしてると信じられない所業に思わず機上から文句ツイートして「飛行機で使うな」と炎上しそうになりますが、ノリで早くも中国旅行が楽しくなる魔法の呪文

が安富先生から発せられました。

「あれ幹部の息子や」

もちろん共産党の。そりやあもう「幹部の息子」ならしようがないですよ、なんたつて幹部の息子ですから。日本だつて政治家の息子しか政治家になれない国ですからね。

東アジアで民主主義たぶん無理だ。

でもこれ大変便利な言葉で、この言葉さえつぶやけばたいていのことは腹が立ちません。だつて幹部の息子だもん。

男女機会均等が日本より遙かに進んでる（というより日本が異常に遅れている）中国で娘じやないのは、短い旅の範囲内ですが女性の店員さんなどで「えーっ」て方はおられなかつたです。ライオンの狩りを見てわかりますように女の人の方が基本的に実務能力高いですから、逆に言うと男つて鍛えないところなんだな、と思いました。

しかしChina Airのいいところはメシとビール。トンカツと餡かけ白身魚のセレクタブルだつたのですがどちらも美味しかつたです。副菜や炭水化物のヴォリュームもたっぷり。ビールも「燕京」(YAN JING BEER) というブランドで、ほぼ常温にも関わらず味わいしつ

かりでなかなかのもの。というより、海外慣れしてゐる人が口を揃えて言いますけど日本のビールがキンキン冷やしに特化され過ぎて変なガラパゴス進化してゐるんですよね。「常温でグビグビイケル」のをウリにするビール売れば売れるんじやないかなあ、コンビニでも「常温飲み物コ一ナ一」できるご時世ですからね。

わたくしも長い準備期間中惰眠を貪つてばかりいたわけではございません、旅のお供に『るるぶ北京』は買いました。

広げて予習をしようとしてると深尾先生が

「アイヤーこれいろいろ載つてるわね」

「えつ、先生中国の専門家じゃないですか」

「北京ウロウロしないから」

「あそなんですか、よかつたらどうぞ」

「……あ食べる所いっぽい載つてる。便利ねこれ。今夜ここにしようかしら。あこつちもいいわね。迷うわー」

なぜウロウロしないのかはすぐわかるのですが、その時は「確かに僕が大阪案内を頼まれても

たぶん『るるぶ』の方が詳しい』ぐらいに思つてました。

そういうしてゐるうちに三時間ほどで北京着。着陸準備が始まる機内で
「僕友だちに聞いてマスク持つてきたんですよー」と両先生の方を見ればもう装着してゐー！ 安富先生に至つてはマイケル・ジャクソンもかくやの白手袋まで。

「手袋まで要りますか」

「何触らせられるかわからんぞ」

「ひいい」

でもきっとお二人は僕にドッキリでも仕掛けてるんだろう、と思つた僕は着陸してデッキ歩いてる時点でドッキリしてました。

真っ白なの。

超スマッシング。

一三年は特に大陸由来らしきPM2・5が話題になりましたのでニュース映像などで「中国各地の大気汚染」なんて霞がかつた映像をご覧になつた方も多いかと思いますが、あれですあれ。

あれスペシャル・ディではなくてあれが日常。あれが毎日。

後日その恐ろしさを友人の父上に語りますと、

「ああ一九七〇年前後の四日市なんか、そんな感じやつたで。駅降りるともう視界は霞んでるわ石油コンビナートの変な匂いはするわ」

歴史は繰り返しますね。

人類は愚かだ、というよりも、同じ条件が揃うと同じことやつちやうということで人種や時代に関わらず人間は人間だということで。

「Sightseeing?」と聞かれたら答えを「No, Combat.」と「サイドビジネス!」で悩むのがオタク道つてものですが残念なことに聞かれもせずに無事入国、空港まで王傑さんという中国人研究者の方が迎えに来られていると。

名前からして関羽や張飛のような豪傑が美髯をしげきながら青龍刀を肩にかけて待ち構えているのかなと思いきや、にこやかに手を振つて待つててくだけたのは文学少女がそのまま研究職に就いたような、いかにも文化系インテリ女性。

日中で同じ漢字に対するイメージがまるで違う好例でした。

普段 「地獄のように並ぶ」 タクシーに今日は比較的すんなり乗れて四〇分ほどで北京市内へ。

タクシーはヒュンダイばかり。しかし車窓から見る路上は高級車and/or新車のオンパレードで、日本の風景とは随分違います。もちろん「オンボロがボロい」のは経年車に対する車検と法が懲罰的に厳しい日本以外の国の共通で、骨と皮だけになつたスズキ・アルトがベンツやポルシェのピッカピカに黒光りするSUVの間を健気に走つてゐる姿を観ると、御年八三になつても軽自動車を潰さんと画策する米自動車業界やそれに乗ろうとする財務省を始めとする高級官僚、提携しようとしたら約束をまるで守らないVWグループなどなど内憂外患と激しく鬪う我らが鈴木修CEOの姿そのままであり涙が溢れて止まりません。

おさむぢゃん頑張つて！

ミニバン見ませんねえ。北米と中国つてだいたい同じで「だだっぴろい道路をただひたすら走る」「大きいの大好き」で腰だめの印象論ですが世界の七割がたぶんこの二国で占められており、つまり世界中のメーカーがこの「米中市場」みたいなものにターゲット合わせてクルマ作つてます。

僕昔、先代トヨタ・カローラが世界百数十各国で売られるワールドカローラから分離され旧型改良のダメドメ（ダメステイック・ダメステイックの略造語。便利なので覚えて使おう）カローラになつた時

「そんな欺瞞はいかん！　ワールドを買つてもらえるように説得するか、栄光のカローラの名を捨てて別のクルマとしてゼロから出発するかどちらかだ！」

とトヨタを叱り飛ばしたことがあるのですが、どこでつて心の中です、ごめん僕間違つてしまつた、日本市場なんてニッチにわざわざ専用車作つてくれるトヨタ自動車万歳、万歳、万歳。いつまでも三河に本社置いててね。あれお台場とか行くと新車発表会に開発陣揃いのブレザーで出てくるような気色悪い会社になつてそんな三河魂（ルビ・サムライスピリット）忘れてしまうと思うから……

何言おうと思つてましたつけ、あそだ北米と中国の違いはミニバン（あとピックアップトラック）があるか無いかじやないですかね。時間の問題？　いや一人っ子政策があつたからどうだろう……あれ一回乗らないと便利さわかんないんですけど、乗るチャンスつてある夫婦が「子どもと親を乗せる可能性がある」つて数年間の瞬間だけなので……とまれ箱車ばかりウロウロして日本の風景から観ると、けつこう新鮮でした。

目立つメーカーはドイツ御三家の高級車、VW、フォード、ヒュンダイ、それからシトロエンが歴史的経緯で頑張つてるようです。中國国産勢もわりとあつて、よく知らないのでどのメーカーがどれぐらいまではわかりませんが、全体の二～三割は国産車じやないですかね。セダン、大型車（高級車とはちょい言いづらい）、SUV、なんでもありました。

日本車はだいぶ少ないです、近年の関係悪化も影響あると思いますが、政治的に市場参入競争に乗り遅れたらしいですね。

まあただ政治マターは、当たりやでかいですが外れた時会社潰れるので機会逸失覚悟で静観するの悪い選択ではない、と僕はSHARPで教わりました。

あの会社「昔は」ですが規格策定とかに参画「しない」という徹底した弱者戦略取つてまして、なぜというなら規格戦争になつた時にしがらみがあると泥沼から逃げ出せないからで……いやもう昔日の栄光は忘れましようや、日本メーカー同士が世界を巻き込んで火花を散らした日々があつたなんてことは……

ホテルは「ASCOTT」というロケハビジネス街ながらかなりいいホテル。長期滞在型の一リビング三ベッドルームの高級ホッテールで、しかしそれが一人あたま日本円で九千円ぐらい。このタイプは、多人数で行かれる時はオススメです。リビングで宴会できますし。

このお部屋は1stルーム奥にバス・トイレがあり、2nd/3rd/LD用のバス・トイレが共用で玄関横、そしてキッチン脇に召使用の簡素なトイレ&シャワー。
いやあ外国来ましたね！

「あつコスメがロクシタンやで。持つて帰れ持つて帰れ」

「そんな河内のおっさんみたいな」

「河内のおっさんや」

まあ小瓶入りなのでお持ち帰り前提ではあるので持つて帰りました。僕もそろそろ河内のおっさんです。

「わーこれ便利デスネー！」

王さんの手には『るるぶ』。王さん北京人ちゃうんですか。

王さんはつい一昨年まで都合九年半も日本に留学されてたので（しかも大阪市立大学が長かつたので僕の家のすぐ近くに下宿されておられたことも）日本語がペラペラなのです。

女性陣が『るるぶ』で夕餉の品定めをしている間、僕はホテルのWi-Fiと格闘してました。繋がるはずなんですけど繋がらない。ま、よくあることです。そういう時こそネット断ちですよ健康になりますよ健康に。

●電動人力車とチャイナドレス

何店か目星を付けて、あとは歩きながら予約というか空席を聞く感じで北京の街をそぞろ歩く。安富先生はATMを探して走り回る。あ、しまつた、空港でもホテルでも何も両替しない。

特殊な旅だつたこと也有つたのですが、僕結局今回の旅でお金の両替しませんでした。この時のレートは一元約二〇円。どんどん元高になつてゐるそうです。

それはともかく北京は……人多かつたッス……なんだろう、たとえば休日の渋谷とか物凄い人と人口密度ですけど、それぞれがそれぞれの目的や方向を持つて、そういう「粒」がたくさんある感じでございましよう？なんか北京は「流れ」なんです、人の河。どういう方向にどういう意味合いで流れているのかまではわからないのですが、信号が変わるとみんな同じ方向に一斉にザ・ザーッと……

高度経済成長期の日本もあんな感じだつたんですかね。

しかしさまざに生き馬の目を抜く世界の中心、まさに「中華」、一〇年前の最新の建物がもうボロ扱いで、もつとピカピカのに中心が移つてるとかなんとかかんとか……六本木ヒルズでできた

のいつでしたつけ？

つか道路そのものが長江もしくは黄河ですよ。

滑走路みたいな、いや僕ソウルのあの滑走路になる道路も歩きましたけど、あの比ではない超幅広道路にクルマがカワイルカのようにブーザーと……

自転車なんか居ませんよ！

あんな天安門広場を銀輪煌めかせて人民服着た皆さんが出勤してるような、あんな光景もうどこにもない!!

ようやくお店に目処が付いてちょっと距離があるつてんで我々の選択した交通手段は電動スクーターの引く人力車？ いやトウクトウクとかともちょっと違う、そういう他ないような簡便な乗り物で。

二台に女性陣男性陣で分乗してここ行つてくださいといふと猛スピードで走りだす。そんな日本みたいな電動「アシスト」で「人力を超えないアシストしかしない」なんて生ぬるいものじゃないですよ。エレクトロ生パワー炸裂推定四〇キロは軽く出でますもちろん横転でもすりや全員死ぬ。

超スリル。

インド映画のアクションシーンぐらいリアルスリル。

つておおい深尾車止まつてのになんで爆走し続けるねーん！

でも安富先生が何事か叫ぶと一八〇度急ターン。

だから死ぬつて、横転したら。

「何て言つたんですかー！」

「こつち金持つてないからあつちとはぐれると金払えないって言つたー！」

さすがです。

都会のみならず田舎でも中国ではこの「電動スクーター」が大普及してまして、むしろエンジン二輪は日本で言う二五〇以上の中大型車種ばかり。

短距離・頻用でその気になれば電池パックの持ち歩きもできなくないスクーターこそ電気駆動にうつてつけだと思ひますし日本の三メーカー（Kawasakiは方針としてスクーターはやらない）とも色氣はあるみたいですが肝心の日本で市場が動かないのは電動アシスト自転車が先に流行つちやつたからですかね。確かにあれあればスクーターのかなりの部分をカバーしちやうんですね。あれで足りない用途になるとスクーターでも足りなくて軽でいいからクルマ欲しいな、

みたいな。

よく言われることですが世界中がグローバルと細分化ローカルの時代でございます。

そんな冒険の末辿り着いたのはなんと大使館街の真ん中にある超・高級料理店。待ち合わせた北京大学の夏先生（災害史が御専門）とその教え子これまた王さん、満州族の超美人ただし既婚、合わせて六人でこれぞまさに「中華」料理をいただきました。

まつたくグドくも重くもなく、あつさりしつつ滋味深く。メニュー？ わからん！ 写真？

見てもわからん！ ような料理ばかりでした、炒飯とか酢豚とかじやなくて。あ酢豚あつたかな、とにかく美味かつた。

食事後は隣の丸テーブルに移動してチャイナドレスの美女がサーブのお茶タイム。向こうのお茶つて凄いですね、急須が小さめと言つても一〇回転ぐらい平氣で出るんです。品種でも違うのか製法が違うのか。何種か淹れてもらつたのですが、プーアル茶が美味しかつたです。プーアルの埃臭さみたいなのが無くて、とつてもスッキリ。さすが本場。

しめて日本円で三万円ぐらい。一人五千円でチャイナドレスのチラリズムを思う存、いや、えー、中国茶を思う存分楽しめたと考えるとリーズナボーンなんですがもちろん北京では超高級扱いです。両先生も

「今日は食べれたねー」

「北京で初めて旨いもの喰つたんじやなかろうか」

と口を揃え……ホンマですか。

「いやもうヤバイよ北京は旨いとこ無い」

「もつとヤバイのは日本の中華料理、ある時……」

例示して下さったお話はここでは書けないホラーでした。料理界も闇深いですね。

それはともかく、中国つて巨大なので、我々のイメージする「中華料理」つてあれ各地のいろんな要素を適当に組み合わせたのちジャパナイズした土着料理ですね、あらためてドヤ顔で言うまでもなく皆さんが存知かと思いますが。

その点韓国料理だと日本で食べられるものがソウルで食べられたりするのですが、あれもひよつとすると観光客向けに「韓国料理っぽいもの」かもしだれない。

「本物」ではなく「本物っぽいもの」が喜ばれるのがこのプラスチック世紀、ファンタよりファ

ンタ味！

帰りは中国勢と別れて三人、そのような官公庁街だけにタクシーが通つてなくて難儀しました。お店に頼んだら「（タクシーは）来ない」とか言うの。なんじやそりや。なんか規制でもあるのか。

と、トボトボ歩いてましたら流し一台発見。こういう緩いところがありがたい。

お部屋に戻つて洗濯機の動かし方で三人で苦闘しました。

電機メーカー勤務歴三年とじつちゃんの名に賭けてなんとか動かしましたが、U-Iがまるでわからない。なんか「乾燥だけ」ってモードが全自動モードの先にあるのよダイヤルの先に。たぶん。

日本の消費者の皆さんやれ最近の家電はわかりにくいたか読みもせんのにマニュアルが読みにくいとかおっしゃりますけどそんなあなた方にはシーメンスの家電を差し上げよう！

ドイツ！ ドイツ！ ドイツドイツジャーマン！

よくこんなもので我慢してゐるなやっぱゲルマン人でマゾなんじやないかなWindows8の方がまだマシ……いや、どつこい……いや、Win8ほどではないかな一度理解すれば使えないわけではないので……

しかし数日後またシーメンスと鬭う羽目になるとは、この時ながたは知る由もなかつた！ダブルベッドを占領してぐつすり寝ました。

○八四〇予定だつた飛行機が一一〇〇になり、朝五時起きが無くなつて余裕ができたかと思ひきや旅というのはそんな単純なものではなく、今日飛ぶ榆林で待つててくださる方に遅くなる連絡する必要が生じるのだがEtherの線挿してもネットが通じない。

フロントに窮状を訴えるとそのEtherの口に挿すWi-Fiルータを貸してくれて……えー……それでは問題解決しないんじやないかという予感がビンビンと……
……あれ、通じた。

お相伴に預かつてワタクシのアイフォーンも接続してみますとおお懐かしいYahoo!のトップにあいもかわらぬ厳選されたくだらないニュースが並ぶ。

Yahoo!のトップはホント硬軟とりまぜ不偏不党（であろうとする努力が見られて）読みやすいですね。一応「ジャーナル」なんですよ。Infoseek楽天やMSNは「まとめサイト」で、コンセプトから違う。このデスクを雇うのに孫さんお金使つたんじやないかな……てソフトバンク

は出版もあるじやん、そっち方面のベテランの方かな？

あー、じゃtwitter通じないー。

Facebookあー、噂通り！ スゲー！ 「1984」 だ 「MATRIX」 だYahoo! なんだか世界史の中に居るつて感じ。

隣では安富先生が機種変更したてのはじめてのスマホに発狂しました。名誉のためにブランド名伏せますがArr○wsです。

「使いにくい！」

「なんでこの機種にしたんですか」

「安かつたから……」

「二年苦しんでください」

「ウゲー」

気合い入れた旅の時ほど身の回り品いつもの持つて行つた方がいいんですけど思わず服とか靴とか鞄とか新しいの買っちゃいますよねー。

飛行機遅延のおかげで食べられた朝食バイキングは中国名物おかゆがとても美味しかったです。なんでしょうね、ダシで炊いたりはしていないと思うのですが（別に掛ける餡みたいなものはある）、お米の質の違いでしょうか。

乳製品はNZからの輸入品なんかだつたのが印象的。すでに中国は食料輸入大国なのです。おかげも何でも美味しいかったです。ワンタンスープとかさすがにイケてましたねえ。もちろんお高めのホテル、というのもあるのでしょうか。

なんてバタバタしてましたら時間ギリギリ、タクシーの運ちゃんに飛ばしてもらいます。聞けば北京近郊で農家もやつてるそうで、昔を懐かしみながらも、人生楽しそう。

結構急ぎ足でチェックインしましたら、ここでまた飛行機が遅れてまして、「こうでなくつちや」と感じ。王傑さんと再度合流。ようやくアナウンスがあつて飛行機までバスで移動なのです。が異様に長い間立ちっぱぎゅうぎゅう詰めで乗りました。

北京空港巨大なんでしょうね。

TAXIWAYでも順番待ち長く待たされて結局離陸は一二二〇頃。機種はブラジルの誇るエンブラエルE190。

僕子どもの頃航空ファンだつたんですけどエンブラエルなんて「聞いたことあるかないか」レベルでした。調べると九〇年代前半には潰れかけてたんですよね。それが今や世界四位の航空機メーカー、三位ボンバルディアを追い落とそうかという勢いです。投資会社への売却による意思決定の高速化と的確さ、それに仕込んでいた作品が大ヒットした相乗効果の模様。そういうJALも破綻・処理後人が変わったようにというか人が変わったわけですが絶好調で、経営つて難しいのか簡単なのかよくわかりませんね。

初搭乗ですが実際小型機のわりには幅高さとも広々した室内で、感心しました。すつごい人詰め込めますしね。

今回僕はちょっと確認できなかつたのですが、先生方によると空から見る北京はスマッグドームで覆われているそうです。二〇〇キロぐらい離れると晴れ渡つて、また次の地方都市がドームごと現れて……まるで『首都消失』ですね。僕あれいつも『日本沈没』とごっちゃになるんです、同じ左京先生ですし……

しかし北京そのものは重化学工業地帯でもないはずですし（ちつちやい工場は北京五輪の時どけたそうです）、自動車は平均車齢でいうと日本より若いんじゃないかという、それもワールドメーカーのものが多いですからそんなに酷い環境性能でもないはずですし、この深刻な大気汚染

の理由が私のようなものにはわかりません。一説には政府首脳に石油利権握つて居る者が居て、それが中抜きして粗悪燃料が市中に出回るから良くない排出物が……

ともあれ、本当に健康に良くないです。

正直友人が「観光で行く」というなら止めるレベルです。まして留学なんてもつてのほか。よほど中国文化系の何かに子供の頃からコミットしてるとかでない限り。

安富先生がよく

「中国人（の金持ち）日本に呼んできて美味しいもん食わして金落とさせたらええんや！」

とおっしゃつるのですが、それホントに腑に落ちました。僕ちょっと田舎へ引っ込むと「空気キレイだなあ」と思っちゃう大阪市民ですが、そんな大阪ですら、北京に比べればエア・ヘブンです。

僕が子どもの頃、SFで汚染され尽くした地球で防護服みたいな着て生活する未来予想図つて割と普通にあつて、おつかないなあと思ったのですがまさか自分が空気清浄機回しつばの部屋に住んでペットボトルの水飲むとは思いませんでした。
地球はこれからどうなる！

と憂鬱になつてましたら一時間ほどで榆林に着きました。

榆林は（日本人）留学生を呼ぶのに熱心な土地で、日本人にも意外とお馴染みの地らしいです。方角は北京から西ちよい南、古都西安の北ほんの少し東にあります。北は内モンゴル自治区、西は寧夏回族自治区。

顔馴染みのドライバーの方の中国製SUVに乗せてもらいまして、日本で言うと堂々のプラド（トヨタ）とかあのクラスだと思うのですが、見て触れて多少言いたいことは無くもないですが普通に走つて乗り心地も良かつたです。ハンドル握ると違うのかもしれません。クルマも中國勢が世界を席巻する日が来るのか来ないのか。日本でも中国車は走らなくとも中国製のはたくさん走りそうです。もうタイ製の日本車ならびゆんびゆん走つてますよ。

市内中心地の平たいレジャービル……高度経済成長期の日本の遺構でいまもわずかに見られます、三階～四階建てぐらいのファサードの平たい建物に銘々のテナントが入つてているタイプの。イメージできますです？

あれが中国地方都市では標準スタイルの「盛り場」のようでした。たぶん日本のように「駅」というセントラルに集まる必然性が薄いので、高層化とか過度の集中化が必要ないのでしょう。土地広いですね。

でも高層でしたよマンションとかなんかビルとか。作りかけのいつぱいあつて中見えてるんですけど、日本人建築関係者なら間違いなく卒倒するほどスッカスカです。

今の日本で建売りでも建ててるところ見ますと気が触れたように柱とか筋交いとか入りまくつてほとんどマツチ棒を並べて家の模型作るがごとく木材を林立させて建てますが（そのわりに壁はペナつペななんですよね、あれはなんでしょう？）こんな地震来たら……

「あ、そうか大陸だから地震が少ないんですかね」

「とても、多いですよ。

日本に、負けないぐらい。

歴史上、たくさん、たくさん、シンデマス」

後日先述の夏先生の弟子の方の王さんがニッコリ笑つて教えて下さいました。

まあ高度経済成長期は人の命より金の方が大切な時期ですから……

さてお昼は、昨今は日本にも進出して食べられるようになりました中華圏伝統料理「火鍋」のお店「小肥羊」（シャオフェイヤン）で会食。白湯と麻辣、白と赤二種類のスープにお好みの具

材を手元鍋にそれぞれ自分でしゃぶしゃぶするというスタイルで、これがまたたいへん旨い！

羊の肉といいますと日本では北海道ジンギスカンスタイルがすぐ思い浮かび、あれも最近は生ラムが当たり前になつてそこぶる旨いものですが、こうして薄切りをしゃぶしゃぶ風でも野趣があつてよろしいです。

ジビエもそうですが元々獣肉つてもには獸くささつてのがありますとそれにかぶり付いて

「うやーっひやつひやつひやつひやー！」俺の獲物だぜーー！」

と悦ぶのが正しい原始人というものではありませんか、たまにはマズローの五段階でいうところの……御託はええわ。

ごまだれが美味でした。

これ外国いくたび思うんですけど外国の野菜とかスペイスとかは大変パンチが効いてて、とい
うか、日本のそれらが異常に水っぽくて物足りないですよねえ。

まあウチの弟とかパクチーはもとより大葉でも三つ葉でもダメな人なんで、日本人「香り」に
敏感すぎて対応しきれないのかもしれませんけども。

私「鼻づん」（「はだがづばつてゐひど」の大坂弁。やばせばびです）ですのでノー・プロブ
レム、たいへん堪能いたしました。

とにかく心斎橋始め日本にも支店があるらしいので、一度日本でも行つてみたいです。

「でもやっぱり日本のお店とはだいぶ違うよ
そりやそうですよね。」

当地の名門大学・榆林学院のえらい先生方と、日本から来てた研究者の松永さんとお会いしました。安富先生がまた話の流れで僕を間違つて「アニメ関係者」みたいに説明してしまい、「土地があり余つて環境も最高の榆林に人材を集め、ジブリのようなアニメスタジオをつくるう！」

というような壮大なプロジェクトの青写真がどんどん描かれて脂汗を盛大に搔きました。

ゲーム屋とアニメ屋は近いようで遠くてですね。サッカーと野球よりは近いけどアメフトとラグビーよりは遠いかな。
どうでしょう？

家電屋と電設業界の違う方がわかりやすいかな、わかりにくいですね、えーっとじやあ住友銀行と住友信託銀行の仲の悪さから……

榆林に立ち寄った最大の理由はこれ、「緑聖」朱序弼さんの訪問です。一二年一月にはNHK『地球イチバン』でも紹介された、黄土高原の緑化に文字通り人生を捧げた英雄です。安富深尾両先生は以前からお知り合いとのことで……

と、ここでいきなり驚愕したのは、肝心のその朱老人の粗末なお家（朱さんは本当に何も欲しがらない方で、何か貰うと特にお金だと、すぐ苗なんかにしてしまうそうです）、の周りがズタズタに開発でハゲ散らかされていたこと。これには両先生も絶句されました。

ほんの近傍まで大きな道路が来てて、宅地なりなんなりに開発するのでしょうかが、なんとか、個人ではいかにその人が偉大でも止められない、時の勢いのようなのを目の当たりにしました。

朱老師はお言葉悪いのですがもう歩くのもわりとヨレヨレでいらつしやるしお言葉もモゴモゴしてらつしやるのでしあしかし、ああいうのつてオーラつてものがありましてね。

予備知識無しでその場に突然誰か来られても、「この人物が主役！」とすぐわかると思います。もちろん周囲の我々も最大限の敬意を持つて接するわけですが。

桃と西瓜をたくさんいただきました。謝謝。

当地いや北京でも、果物を事あるごとにバリバリ食べまして、特に夏は西瓜。乾燥しますから、水分補給も兼ねているのだと思います。（皆さんお茶もガバガバ飲れます。日本人よりもあるいは飲んでいるかも）品種的もあまり甘くなくて、食べやすかつたです。いま日本の果物はちょっとと甘すぎますよね。僕子どもの頃みかんなんざ一日一〇個とか平気で食べたもんですけど、今絶対無理です。

僕はたぶん、こういう篤志家といいますか、教科書に載るような「社会や共同体のために（明示的に）人生を費やした方」と間近でお会いしたのは初めてでしたので、なんといいますか、たいやんムービングでした。ああいう時、人は自然に手を合わせますね。いや仏教圏だけの習慣かもしちゃませんが。

握手してもらいました。

少しはマシな人間になれるかしら。

もう少し旧交を温める一団から別れて僕と王さん、それからタールン（これからお邪魔する楊家溝ホスト・ファミリーのご長男。今は街でお仕事をされている）の三人で「綏徳」という駅まで帰りの北京行き夜行列車の切符を取りに。

これぞ黄土高原流「行き当たりばつ旅」で、事前予約などを最小限にしてその都度その都度紡がれる「縁」によつて行動すると物事はどんどんいい方に回る、という作戦。

榆林学院の偉い先生に綏徳の駅長さんに頼んでもらうとちよどいかんじの切符が手に入る、まさにコミュニケーションの魔法。

……と、後ほど友人の鉄つちゃんに語りましたら

「ああ国鉄時代は日本にもあつたのよ車掌裁量・駅長裁量の切符が」

「へー」

「基本は慌てて切符無しで乗る人なんかのために開けてあるんだけどね」

どんどん社会からバッファが無くなつてギスギスしていきますなあ。スマーズ・クリミナル。

綏徳の駅はなんといいますか山間の田舎に突如現れた近代駅舎で、そのくせ夜行も走るからか人に溢れてて。

駅前駐車場もちろん未舗装、の前に祭り屋台みたいなのが出てなにやら食べ物つぱいものを売つていたり、乗合自動車みたいなのが客引き合戦をしていたり、駅の売店では麩菓子みたいな地元のおみやげを売つていたり、なかなかアジアでした。

ああそりそり、ここでようやく「アジア」っていう言葉でイメージする風景に出会えた気がする。

どうでもいい話ですが、ま、この稿はどうでもいい話しかないのですが、僕子供の頃から「アジア」って言葉のくくりの強引きにちょっと違和感があつてですね。まあそういうえば「ヨーロッパ」ってのも随分強引でロシアやトルコの立ち位置は、とかいろいろ疑問起きますんですが、確かに文化風習などで共通項とても多いんですけど共通項が多いからこそ違ひが際立つという面も人間の心理にはあつて、非関西圏の人にはまったく理解できないでしようけど京都・大阪・神戸というのはそれぞれ全く別物としてね？ 我々いや私やもう卒業しましたが、製造業の人間は「北米」つてくくりをよくするんですが言うまでもなくカナダ・アメリカ・メキシコはまったく違う国で、このくくりはそれに近い印象を持ちます。

でもそんな僕でも「ああ同じだなあ」と思うシチュエーションのひとつがこの「屋台で何か売つたり買つたり」という風景で、なんとなく吸い寄せられて何か買いそうになります。

昔友人と二人でソウル行つた時はさつき朝飯喰つたばつかだというのに屋台でトッポギと海苔巻きをいただきました。

いや、ヨーロッパの屋台とはちよつと違うんですあれはあくまで「簡便なお店」なんですけど、

アジアの屋台は行商の延長で感じで……

かんなり待たされてとつぱり日も暮れましたがそこは大国・中国、三人で「遅いですねえ」「まだですかねえ」とのんびり待ちました。

タールンがどう?と勧めてくれたタバコはマルボロで、王さんがどう?と勧めてくれたキャンディはIKEAのPB。グローバル世界!。

あとで気づいたのですが、この切符は僕はともかくとして王さんにもタールンにも何の関係もない切符なのですが、こういうとこ何の躊躇いもなく行動してくれるところが中国人の懐の深さだと感じました。

さて、なんとかかんとか切符をゲット、日も落ちた山道を飛ばすタールンのフォード・モンデオの革シート付いてるええグレード。クルマ好き向けに言えばGHIAですよGHIA。

たぶん日本で買うと三〇〇万ぐらいすると思うのですが(今モンデオは正規で入れてないのですが、トヨタで言うとマークXとかあのへんです)もちろん新車。「ローンで無理して買つた」と笑つてましたが、つまり経済右肩上がりと少々無理目のローンでも組んで便

益先取りできるんですよね。例えば何かの拍子でクビになつたりしてもまあ探せば職はあるわー、って感じで。日本でもほんの一〇年前まではあたりまえの風景でした。

世界的にこの「前提」みたいなのが崩れてきているのは事実なので、それをもう一度取り戻すようにアクションを起こすのか、その前提そのものがおかしかつたんだから新しい考え方でいう、というのか、これは意見と考え方が分かれるところです。

僕はどっちかというと後者かなあ。

軽自動車ばつか売れたり「若者の○○離れ」みたいな話も、後ろ向きの縮小均衡つてだけではなくて、「適切なものを適切な時期に利用する」横文字でいえばなんでもオンデマンドという考え方が進化・浸透してるとも考えられますし、一〇年前より社会の進歩超速いので二年前のスマホなんかゴミ。（そうそう彼は携帯もiPhoneでした）そういう時代に

「いいものをそれなりの値段出して買う」

なんて購買行動に合理性はありません。もちろん、合理性で人の行動が全部説明できるわけでもないんですけど。

山道を一時間ばかり走ります、でも人跡未踏の真っ暗闇、つてことはなくて、まあ舗装路ついてるぐらいですから当然ですけど、あいだ・あいだに村があり、ひとつの村ではお葬式の真っ最

中で派手に爆竹が鳴り響き太鼓が叩かれ提灯行列みたいなのがありますとその中を走りました。あとそう、牛飼つてた。

まだ農村では現役労働力だそうで、そこかしこで家の庭先に牛さんが繋がれています。ライトに照らされクルマが真横を駆け抜けても動じること無くつぶらな瞳でこちらを見るばかりでした。

●楊家溝

はてさて、ようやく着きましたは我らが楊家溝（村）、日本語では普通に「ようかこう」と発音していました。簡体字表記はGoogleマップで見てください。

「なんでこんな勝手に省略してんですか！」

「日本の当用漢字もそうやがな」

そうでした。

「中国の歴史が読めないようにする一党独裁共産黨の陰謀」

という穿った見方もありますが、普通に「字画多くてめんどくさい」という民々の欲求ですね。しかし世はコンピュータ時代、日本でも姓名で「齋」「濱」「澤」など難しい方の字を使う人や

ケースが増えてきました。だんだん戻っていくのかもしません。

正直戦中までの文章つて生だと（新体字への変換が行われていないと）僕みたいな専門訓練積んでない人間には結構読みづらいのです。これも日本人が専門家以外なかなか近現代史を振り返らない遠因のひとつかなあ、と思つてみたりも。それは余談。

闇の中笑顔で出迎えてくださつたのはタールンのご両親である智恵さんとルオリンさんご夫婦、そしてお兄さん。ペットのイヌのファーフア（ホアホア（花花）と表記するのが正しいそうです）が、僕はずつと「お金なんかちょっとでクマ」の発音してました。ちゃんと応えてくれてました）、ネコのミィーミィー。

それでもうひとつなの？主役は四連の石造り住宅、窑洞（ヤオトン）。写真などググつて見ていただくとよいのですが、一見山肌を繰り抜いた洞窟に見えますが、そうではなくて山肌削つて作つた平たい土地に石を積み上げて作るそうです。

これが中に入ると得も言われぬ安心感といいますか、普段木と紙と練り土でこきえた住居で風と光と近所のおばちゃんの挨拶の声と宅急便のピンポンと共に生きる我々日本人にとつてはかなり衝撃的な居心地です。

もちろん夏は涼しく冬は暖かい。高原なので寒暖の差が激しく、昼はカラツと暑く夜はそこそ

こ冷え込むのですが、だからこそ発達したこのヤオトンは大変快適でした。

ヤオトン前には家庭菜園があり、トマトに茄子にヘチマにカボチャ（棚で作る）に唐辛子、二ラにネギに……となんでもござれ。さつそくトマトを一つもいでいただきました。とつても美味しい。

夕食はお豆腐と野菜を炊き合わせたスープに、栗と緑豆のおかゆ。

ご当地ではおかゆをしそつちゅういただきます、むしろ「炊いた米」の割合の方が少ないかも。肉まんとおかゆ、とか、棗餡の詰まつた揚げパンとおかゆ、とか、そんな感じです。

それから、忘れてはならないのはこれからずーっとお世話になりましたレギュラー・トッピング。五味＝すりごま・黒酢・トマトペースト・ネギ・香草入りひまわり油、これをお好きな分量お好きな割合で何にでも掛けて食べるのです。

これがまたどれもパンチが効いてて風味良し、同じ料理の目先がガラリと変わるのでまたついつい食べ過ぎる。

料理そのものの味付けは（我々日本人に合わせてくれてもいるようだ）しつこくなく塩辛くもなく、素材の新鮮さ・自然さとあいまつていくらでも入つてしまうのです。

「体に馴染む味」

とでも申しましようか。

そもそものはず、知恵さんは料理の腕を乞われて宴席や祝儀不祝儀に駆けつけるような村屈指の料理上手、ほとんどプロ。いやあ……美味しい。

満腹満開でトイレは、おお久しぶりにボットン便所、裸電球を中間スイッチでオンにするのも懐かしい。一応ティッシュとLED懐中電灯も持つてきましたとも。

寝る前にはみんなで長旅で凝った身体をストレッチなどしつつ星鑑賞。わずかに残念なことにこの旅行中、月が大きな日取りで、お月様は美しかったのですが夜空明る過ぎて星はさほどではありませんでした、夏ですしね。といつても、天の川はちゃんと見えるほど。もちろん空気は肺が悦ぶ清浄さ、北京の悪夢が嘘のよう。

ヤオトンは奥の方が一段高くなつてて下にオンドルが仕込まれたベッドになつています。冬はそこに石炭ストーブの熱氣を送り込んで暖を取るそうです。

松永氏と二人寝床にはいりますと疲れもあつたのかストーンと眠りに落ちました。

僕見てくれよりも神経質なのですが（書いてるもの読みやわかりますね、すいません）、この

旅行中は寝付きで困つたことはありませんでした。

北京はともかくこちらでは悠久の大地、頑丈なヤオトン、そしていくら吸い込んでも肺が耳鼻咽喉がイヤイヤを起さないきれいな空気、が効いていたのかな、と思います。

あ、ネット見てなかつたからかな……

参考文献としてこちらを。

『楊家溝村日本人結婚式の経緯』深尾葉子・安富歩

<http://individuals.iii.u-tokyo.ac.jp/~yasutomi/hunli/index.html>

こちらに僕らが泊まつたヤオトンの模様やホスト・ファミリーの皆さんのお写真も。実はこの企画の新婦さんのお里のうどん屋さん（大阪八尾）には、私一時期毎週のように通つてました。

縁は奇なもの味なもの。

●竜王廟

朝は六時半自主起床、外に出ると空気は一層静逸ながらさすが農村、もう既に人の活動の気配がそちらこちらで。

朝の散歩はお兄さんに連れてもらつて、松永さんご所望の小高い山の上にある祠、「竜王廟」へ。深尾先生と王さんも一緒です。安富先生はヨガで逆立ちされてました。

そうそう、ファーファの散歩も兼ねてたのですが、ご当地では「犬を散歩させる」という習慣が無いそうで、「あつ！日本人来た！これで一年ぶりに散歩できる！散歩できる！散歩できる！散歩できる！」

ともう発狂モード。繫いでる鎖を外すのにも一苦労なジャンプアタックを繰り返され、こういう時人はムチゴロウさんになる。

「よーしよしよしよし、よおーしよしよしよし」

日本語通じないのかおとなしくなってくれなくてですね……

当然散歩の習慣が無いので日本で見かけるようなリードというようなモノはなく、適当な紐も無かつたので鎖そのまま、僕が持ちました。

犬の散歩久しぶりだなあ。

昔、父がプチ出世した時に「夢やつたんや」と血統書付きの柴を買ってきましたが、当然父は仕事行きますので散歩家族で交代でやりまして……面倒でしたわ（笑）
あれ犬派猫派つてよく言いますけど、それよりその家に散歩文化があるかないかがクリティカルだと思います。無いか散歩そのものに価値を見出さない家族に犬くるとその犬か家族があるいは両方が不幸になる。

死ぬ直前までちゃんとほぼ毎日行きましたよ!!
うんち袋持つて !!

僕は菊池寛先生ではないので父に恨みはほぼ無いのですが、あの犬もらつてきて散歩丸投げしだのだけは今思い出しても勘弁してくれと心底思います。

それはともかく。

つまり基本番犬もしくはインターほんであつて愛玩担当ではないのですね。

「そんなの動物虐待じゃないか！」

といえばそうではなくて、先代が亡くなつた時（彼の名もファーファだつたそうです）一家で悲嘆に暮れてご飯も喉を通らなかつたそうで、まあ文化的な差異つてのはなかなか消化が難しいものですね。

超喜びでジャンピング・ラッシングのファーファを「どうどう」言いながら歩くこと一〇分ほど、そこから山を登ります、山と言いましても普段から農地として地元の人々が活用してるものですから道も付いててその傾斜も手頃、そりやこんなところ毎日昇り降りしてれば土地の皆さんスタイルがいいのも領けます。

この「米脂県」という地方は日本で「秋田美人」などと言いますように美男美女で有名な方だそうで、「米脂的婆娘、綏徳的漢」と讚えられるそうです。昨日駅に行つた綏徳もすぐ近く。確かに男性は筋肉質逆三角形に引き締まり、女性は脚長く細くヒップアップで、ルックス最近ではアピアランスとか言うんですつけ、においてはスタイルつて決定的だなあ、と改めて思いました。実は顔立ちよりもウエイト重いのかもしれません。顔はかなり化粧・髪型・アクセその他でゴマカシが効きますしねえ。

棗（ナツメ）やじやがいも、綠豆、トウモロコシのたいへん絵になる千枚畳を観ながら頂上付

近に辿り着きました。

千枚畑・千枚田は現実に目の当たりにしますとホントに人間の可憐さ・儻さそして嘗為の偉大さを感じられて感激します。

実際日本帰つてから写真など見せますと「お一つこんなところに行つたんですか！」と一番反応されるのがこの山から見下ろす段々畠の写真でした。農耕民族の胸の奥の何かをくすぐるのでしょう。「お主やるな」みたいな。

しかしそこから祠に至る最後のアプローチがもう何年も人跡未踏らしく、藪に覆われています。この藪つてのがご当地悪名物の「ガチヨン」という灌木植物で、なんでも食べる羊も食べないで有名な鋭いトゲ、いやむしろ針に覆われた難物です。

そう動物が食べないコイツがまず繁殖してサラサラの砂地をしつかり地面として固め、そこに他の植物がやつてくる、という段取りで、自然のサイクル的には大変重要な生き物なのですが、我々人間にとつてはホントに高さ膝までの奴が道に生えてたらもう通れない、とかそのぐらいの超厄介者。

ここで話には聞く

「中国人は（仲良くなると）義理堅い」

の実例を早速見ました、お兄さん、と言いましても申し遅れました、知恵さんルオリン夫妻が五〇代半ばですので六〇手前だと思うのですが、そのトゲットゲを物ともせず、薄い布靴（カンフー映画で見るあれをご想像なさい）で踏みつけ踏抜き、枝を慎重に手で掴んでは折り、道を作つてくださるのです。

マチューテでもあれば別ですが徒手空拳で我々のためにガチヨンに立ち向かつてくださる姿にはちょっと感動しました。

アプローチがそんなものですから竜王廟そのものも、建立は一〇年二〇年前程度とかなり新しいそうですし、日本のお稲荷さんみたいな小さなものではなく「小屋」というレベルの建物に中庭付き、三体の御神像は人間大以上、という結構立派なものなのですが、尋ねる人も居ないもので荒れ氣味です。

五人でお掃除つてほどでもないですが片付けをしたり、もちろんお線香焚いてお参りも。ご本尊の神像は三人のおじさんが正装で座つており、真ん中が竜王様なのかな？ この後別の寺院にもお参りするのですが、非常に人間臭い感じでした。

イメージとしてはギリシャ・ローマの神々の彫刻に近いかもしません、神様なんだけどあくまで人間として描かれているような。

ただし造形がなんとも拙いというか雑というか、もちろん技術が無いわけではなくて「そういう

う造形」だとは思うのですが、色形ともにケバケバしく、むしろそうやつてできるだけ非写実的にすることで浮世離れした神様感を出しているような感じ。

日本のイベントで実物大ドラえもんや鉄腕アトムを見た時のようななんともいえない恥ずかしさがありました。

余談ですが二次元のキャラクターを「等身大」三次元に起こすのは一般的に極めて困難であり、以前パチンコ店の店頭ディスプレイで等身大ケンシロウ（『北斗の拳』の主人公）があつたのですが、公式設定の身長一八五センチにあの隆々たる筋肉と一〇頭身あるいは一二頭身に及ぼうかというギリシャ彫刻的英雄体型を当てはめると大変に頭部が小さくなり、それを見た友人が「ケンシロウ意外に小顔やな……」と呟いたのには微笑を禁じ得ませんでした。

ここで初めて中国土着の「宗教」に触れたわけですが、なんだかよくわからないですね。基督教だとと思うのですが、今の我々が、たとえば台湾の道灌やそこにお参りする様子の映像を見たりしてイメージするアレほど確固たるものではなくて……

やつぱり文化大革命で、宗教施設には物理的にも心理的にも大きな断絶があつたのでしょうか。なによりガッカリしてたのは研究者の松永さんで、現実を見れば「竜王廟が村落共同体の中心

として機能し……』という絵が描けなくなつちゃつて、さてどうしよう、という感じ。後ほどまた言いたいこと言いの安富先生が「いやだから中国には『村落共同体』てのがそもそも無いの」とネットワーク型の人の繋がりを説くのですが、松永氏は腑に落ちないご様子。

もちろん僕は知見が無いので静観。でも日本のムラと外見的にはそつくりなので、鎮守の森があつてお祭りがあつてそれそのものが求心力になつていて、という物心の構造を当てはめたくる気持ちもよくわかりました。

池谷薰監督の名作、映画『先祖になる』を拝見してましても、あの太津波とそれによる徹底的破壊で崩壊した村落に笑顔が戻るのは、やつぱり「お祭り」が復活した時だつたんですよ。ムラの生き残りがありえないような情熱と真剣さを持つてその地方に続くお祭りをなんとか開催して、みんなで涙を流して喜ぶんです。

しかしじやあそういう求心力が無いかと言えばそんなことはなくて、日常のいろいろに混ぜられているようです。

前段で参考資料として掲げましたが、二〇〇四年にご当地で（日本人の男女が）伝統的な結婚式を復古させて挙げる、というイベントが企画された時は、我も我もと数千人の人々が我々が今泊まつてゐるヤオトンの周りに詰めかけて、裏山が崩壊しないかと心配されたほどだとか。

このへん、最近は日本でも「山村で昔式のガツツリ婚礼を」というのをやりますとニュースに

なつて地方紙や地方局が飛んできて一種のお祭りになりますから、同じですね。

このへんにズレがあるのが、わかるようでわからない、わからないようでわかる、近いようで遠くて遠いようで近い、という感じです。

竜王廟でお兄さんが語つてくださつたところによると、政府共産党も最近は汚職摘発に大変熱心で、だいぶクリーンになつたそうです。むしろ小役人が震え上がつてているぐらいで。ただ、ということは何十年もベッタベタの中抜きが普通に行われてきたということで、ホントに汚職は東アジア文化圏の宿痾ですなあ。

日本だつてあれですよ、特別会計とか天下りという形で表面化してないだけで知らない間にお金消えまくつているわけで。

ともあれ廟からの景色は素晴らしいものでした。段々畠に、点在するヤオトンに、地方豪族の大邸宅（現・革命記念館）。

なんだか別の世界に来たみたい。

帰りは棗を落ちてるやつ拾つてひとつふたつ食べてみました。生棗は食感は林檎と梨の中間み

たいなシャックリ系で、でもサイズ小さいので食べごたえはあんまり無く、甘みもそんなに無いです。「素朴」という表現がピッタリかな。日本だと山間地の子どもがスカンボ（イタドリ）折つて食べるじゃないですか。あんな感じかな。

熟した実も齧つてみましたが、こちらは果肉がスポンジ状になつて味もなにもありませんでした。熟したのは生薬にしたり、もつと乾燥させると甘みも出てドライフルーツとしてイケるそうです。

中国特に北部では超スタンダードな植物であり食物であるようです。

わたし昔文藝部に所属してたような者で、通学の電車の中では岩波の緑色を開いて「近代日本文学に親しんでる少年」を演じてましたが、それらやもちろん中国の古典文学には、よく「ナツメ」が点描として出てくるんですね、庭に生えていた、とか、実が落ちていた、とか。

ところが日本では、いや見かけるのは見かけるのですが、山に自然と生えている椎や檉のような風景扱いで、なんとなく実感がなかつたのです。あまりおやつやお菓子にもなりませんし。

それがひとつ「ああこういうものか」と理解できました。

穿つた見方をすればやっぱり戦争があつたので、「棗がある風景」というのを日本人が忘れたがつてるのかもしませんね。

ヤオトンに帰つてから深尾先生発案でミイーミイーとファーファの洗濯。ロクシタンのシャンブレですよ。

ファーファはむしろ気持ちよさそうだったのですが、問題はやっぱりネコだけあつてミイーミイーは嫌がりましてねー。

そこで気づいたのですが彼は左手（前足）の手首から先が無いのです。なんでも山でウサギ用の罠に掛かつてしまつて、自分で引きちぎつて逃げてきたそうな。なんとも痛ましい事故ですが、胴とか食いちぎられなかつただけマシと考えるべきか。前足が突つ張れないでの四足歩行とうきぎ飛びの中間のようなひょこひょこした歩き方なのですが、気丈なもので後日裏山で他所から来たネコと喧嘩して追い払つてました。人生には気合が大切ですな。

水を嫌がるのもあるのですが犬の散歩の件と同じで猫もベタベタ可愛がるという習慣がないそうで、猫歴＝人生のワタクシのエステ技術を用いてモミモミしてあげますと
「な、なにをするか」

的に恐れおののきます。

しかしこちらも最盛期には五匹飼つてた手練れですから手を変え品を変え。ポイントを強弱を変え試行錯誤を繰り返しますと遂にはおとなしく撫でられるようになつてくれました。
さすがに「撫でれ」とやつてくるところまではいきませんでしたが、あれはその子の個性にも

よりますし、その子とその人間との相性みたいなものもありますので。

あまり「喉鳴らし」の経験も無いのかそんなにゴロ言つてくれませんでした。ライオンでも動物園などで人間によく慣れた子ですとゴロゴロ言うらしいですから、あれもあくまで満足で自然に出るというよりも、人間など仲間との関係性で発生させるコミュニケーション手段かもしません。

嫌々ながら洗われたミィーミィーが日向で身体を干してますとお兄さんが蹴飛ばしていきましたて、あらお兄さんミィーミィー嫌いなのかしら、と思いましたら、なんと目がほとんど見えていらっしゃらないとのこと。

そんなバカな、さくさく山道登つて行かれましたよ？
まったく気がつきませんでした。

ずっと住んでる村とはいえ、人間の認識とか認知つて本当は一体どうなつているんだろう、と考え込みます。眼や耳、またそこから入る情報はあくまで補助に過ぎずなにか未知の感覚器みたいなものがあつて、いや「感覚器」という考え方がそもそも先入観となつてているデカルト的自然観であり……

太陽が昇つてくると日差しがかなり強くなり、日向は暑くなつてきました。でも木陰なら全然

大丈夫。

湿度の関係でしょか、日本でも山あいに行くと割とそういう感覚もありますが、あ言いましてつけ僕の行つてた中高は合宿の好きな学校で、毎年のように黒姫の山荘へ行つたんですが、でも黒姫付近と比べてもずっとカラツとしてました。

震災・原発絡みで節電節電と煩かつた一一年の夏も、そこかしこである年齢層から上で「そういえば昔こんな感じだつたような気もするね」という声が聞かれましたが、エアコンを筆頭に現代の人間が活動で排出する熱エネルギーって、想像してるよりもずっとゴツツイものなのかもしれません。

●小麦食うぞ

さて、一歩きの後でお楽しみの朝食はいきなり！（ご当地名物「ハーラオ麺」（漢字は「食」編に「合」と同じく「食」編に「各」、「ハーラー麺」とも）捏ねた小麦粉の塊をパスタマシンのような底に穴の空いた金属の筒の中に入れ、それをテコの原理で上から押し出して、下には煮立つた鍋が待ち構えてて即茹である。

見た目のイメージとしてはちゃんと麺が近いのですが、腰はそんなに無い方向なので給食の

ソフト麺とかあんな感じかな。

ここでまた大阪人の天邪鬼吼えさせていただきますと讃岐ブームに端を発し世のうどんは「コシ信仰」、しかしこの高齢化社会が加速度的に進む日本いや地球において食人に不必要な頸運動と強い噛切力求める食品ばかりを神輿に挙げてワッショイワッショイ持ち上げ、あまつさタピオカまで入れて「コシ」という冷静に考えると「えつ『かたい』とどう違うの?」とよくわからぬ観念に阿るのはいかがなものでしようか。

大阪うどんはやーらかいでございますよ名店道頓堀『今井』を筆頭に、うどんというものは箸で持ち上げた瞬間には切れずお口に入れた瞬間切れるそうM&M'sのチョコレートのような食感が、もちろんベストとは言いません人には好み趣味趣向がございますから、しかしそれらも認めて頂いてもよろしいのではないですか、ねえ!伊勢うどんのみなさん!?宮崎うどんのみなさん!?名古屋メシお馴染みあんかけスパのみなさん!?稻庭うどんにヴェトナムのフォー、忘れちゃいけない懐かしの喫茶店ナポリタン、まだまだコシのない麺は世界にたんとございますよむしろコシでごまかされて! 小麦粉そのもののそして水・塩・出汁・具の良し悪しを見失つてはおられまいか!!

という方にはお勧めの麺です。

地元のみなさんのソウル・フードだそうで、この地方の楽団を日本に呼ぶというイベントを企画した際には、ハーラオ麺製造に必要なこの巨大な鉄の押出機と鍋をも日本に持ってきて、会場近くのホテルの厨房などを拝み倒して借りてはハーラオを作つては楽団員が涙しつつ啜る、という光景がみられたとか。

中国はその昔は華北は小麦文化圏、華南は米文化圏として、こちら北方ですから基本は小麦文化なんだと思います。小麦と言つてもパンではなく様々な形の麺。イタリアでいうパスタです。ちよつと古い中国産『西遊記』（の翻訳）を読みますと食いしん坊の猪八戒の描写、日本ならドンブリ飯を搔つ込むようなシーンでよく「うどん」が登場します。これはこのハーラオのような各種の麺を指しているのを、日本の翻訳者が訳に困つて一緒にうどんにしたのでしょうか。

これに、本日はトマト・いんげん・人参・ピーマン・じやがいも・豆腐などを煮込んだスープ（スープベースちょっとわかりません）を掛け、そこに前夜ご紹介しました五種トップピング（すりごま・黒酢・トマトペースト・ネギ・香草ひまわり油）を好きなようにアレンジして頂きます。

つけあわせは一見ただの胡瓜のスライスだったのですが実はこれが工夫物、ニンニク・生姜・酢・塩・砂糖に鶏ガラスープで和え、生姜の粉、花山椒、クミン、茴香の粉をごく軽く振りかけ

てあります。ピリッと味が引き締まり胡瓜の香りも引き立ちつつ味わい豊か、ヘタなサラダなど裸足で逃げ出す立派な「野菜料理」でした。

まとにかく、美味しい。

前日も言いましたように口馴染み身体馴染みがよく「なんぼでも入る」系でして、山歩きで軽く身体動かした後でもあつて超もりもり食べてしました。

素晴らしい。

いや出発前に安富先生が「世界一メシが美味しい」などとおっしゃつてたので、またまた大阪のおつちやんらしい、

「琵琶湖よりでかいクジラ見たで」

言うあれかなと思つてしましたらホントに美味しい。

なんでしょうね、いきなり二日目にして結論めくのですが、つまり普段の僕らは根本的に間違つてるんですよ。方向が二方向あるとしたら、みんなして上ばっかり観てるんですけど、実は上を観ると自動的に下がおろそかになる、しかし「下は大丈夫」という勝手な思い込みがあつて、そこに隙ができる。その時にこういう「そこ」を突いたものに出遭うと、

「ほあああああ！」

とひっくり返つてしまします。

僕たまに行く中華のお店あつて名前出すと「あああそこか」と食通に鼻で笑われるお店、そこはなんでも美味しいんですけどあるとき友人と行きますと「お若いんですね最後に汁ソバでも」とリコメンドいただきまして裏メニューいただいたんです、具は白髪葱と細切りチャーシューだけの黄金のスープに麺が浮いてる汁ソバをね。

これがビックリするぐらい美味くて、ラーメン系の食い物でヘタするとマイ・ヒストリーベストなんんですけど、これたぶん「売り物」にならないんですよね、というような話をカー・セールスのその友人と語りました。私もむかしやマーケティングの真似事みたいなことしてましたもんで。

たぶんその「売る」つまり金銭媒介のコミュニケーションに乗つてる物つて、何であれそこで一回その本来の価値と違う金銭価値みたいなものに「変換する」必要があつて、ここでいろいろだいじなものが落ちるんです。全部とは言いませんけど。もちろん、受け取る時にもう一回変換が行われるので、ここでも余計な夾雑物、たとえば「コストパフォーマンス」などというくだらなさ極まる概念とか混ざってきて、本質から目を逸らせられる。

で、結局「目黒のさんま」のお椀状態になつたものをフタ開けてくんくん嗅いで「ああさんまださんま、あこがれの」と涙ぐむ殿様みたいなことをやつてるのが現代都市人ではないですかね。

ここには、料理人が「美味しい」と思うものを作つて出して、食べる人が「美味しい」と思う、ダ
イレクトな関係があつて、こうであると多少のズレがもしあつたとしても、すぐアジャストでき
るんです。

パトロンが描かせてた頃の絵画の方が「ちゃんとしてた」ように、相手がいなければひとりよ
がりになりますが、さりとて不特定多数を意識するのも実は大変危険で、ありきたりな表現です
が「おたがいの顔をイメージできる」関係というか、それがやつぱり「生活」つてものの基本だ
なあ、と。

朝食後、先生方は難しい議論されているので、僕はのんびり過ごしました。

庭先から少し遠くに隣家の庭先が見下ろせて、そこでは鶏が駆けまわりヤギがもぐもぐ何か食
んでました。我らがヤオトンにも二羽鶏が番で居たのですが、大人しい子達であまり鳴かなかつ
たです。野菜くずや食べ残しを黙々と消化してくれれてこれぞリサイクル。

といつてもうお昼です、さつき朝食べたばかりなので軽く、ということで出ました餃子、
もちろん水！

これを黒酢につけて食べる。

皆さん水餃子には黒酢ですよ黒酢。日本でお馴染みの醤油+酢+辣油ではすぐ薄まつてしまい

ます。辣油も「食べる辣油」的に刻み炒めニンニクなど混せてコッテリさせた方が水餃子には合いますね。

なにより皮が分厚くて美味しかつたです。餃子特に水餃子のポイントは皮ですねえ。小麦（粉）はご当地ではあまり穫れず買つてくるそうですが、産地でなくとも使いこなせるのは日本人だつてほとんど輸入してゐるわけで。

このへんは北方、モンゴルを始めとする遊牧民の文化や西方に足を伸ばせば中央アジア・シリクロード、あちらの文化もすこしずつ入つてる模様です。

そうそう、印象的なのは大蒜（ニンニク）の香り。よく「中国では餃子にニンニクは入れない」と聞いたのですがこちらでは入つてました。というより、北京人である王さんのリクエストで抜いてくれたぐらい。

しかしまつたく臭くもクドくもなくて、これは掘りたて新鮮だからでしようか。

料理上手の文豪といえば檀一雄先生と水上勉先生がまず思い浮かびますが、そういう文豪は戦時中中国におられた経験からか、日本人（特に当時の）には珍しくニンニク・ショウガ・ネギで味のベースを整えるのが得意技（『壇流クッキング』より）。対する水上先生は禅寺の小坊主のご経験からか野菜の素材の味を引き出す丁寧な手間暇に特徴があつて、料理も最後は人柄といふか人生そのものだなあ、と感心した覚えがあります。

お二人とも「しようがなく始めたんだ」と謙遜されるのですが、それなら功成り名遂げたあと
はする必要のない手仕事なので、やはり好きこそもののか上手なれ、ですね。

小麦についてもう少し言いますと私数年前からホームベーカリーで家族のパンを焼くようにな
りまして、元来がオタク体質ですから通販で容易に手に入る類の小麦粉はいろいろ試してみまし
たところわかつたことが、日本人はあまりに小麦粉に無頓着。

お米を思い出されれば一瞬で理解されると思うのですが、あれですとやれコシヒカリだやれ魚
沼だやれ農家の顔写真、口やかましく由来出自を聞いたやすくせに「メリケン粉」となると突然
スーパーで特売の日清製粉の黄赤白のお馴染みのアレ一辺倒。

同じ穀物ですから言うまでもありませんが品種産地出来不出来でまったく風味が違います。ス
タンダードな「イーグル」（カナダ・アメリカ産系ブレンド）と「はるゆたか一〇〇%」（北海
道産）を比べてご覧なさいな。当然出来上がったパンも他の条件がピタリ同じでもまったく違う
味です。もちろん「はるゆたか」の方が日本人好みの控え目ながらじんわり旨味の広がるお味で
美味しいのですが、「イーグル」もトーストするとサクサクして「あ、これ食べたことがある！」
というお味に仕上がりります。というか、パン屋さんでもよく使われる粉だそうで当然なんですが
ども。

なぜこんなにわざとのように今やひょつとすると米よりも食卓において重要な地位を占めかねない小麦の由来を無視するのか理解不能なのですが、もちろん偉そうなことを言つてますが僕も四〇年近くまつたく不間に付し続けたわけで、これはきっとアメリカの陰謀ですね。

さつきのうどんの話にも絡みますが、お米料理思い出していただけますとわかりますように小麦（粉）料理も小麦（粉）がおそらく決定的な味の要素です。そこらのお店のうどん・パンより美味しいものが、高い粉さえ使えば誰にでもできます。嘘だと思われるなら飼料米寸前の安古米を料亭の炊飯名人が炊くのと「ゆめぴりか」新米を僕が中級炊飯器で炊くのとどっち食べたいですか？

ではなぜそこを隠蔽・無視しているのかと言いますと、ひょつとするとそれを言い出すと多くの「パン職人」や「うどん名人」が成立しないからかもしれません。（もちろん腕自慢が高級粉を使えばより美味しいのですが、とても高価になります）

なぜこの直接関係ないことをグデグデ言つてますかと言いますと、たぶんこの、
「それを言つちゃおしちゃよ」

という根本のところから目を逸らしたいからどうでもいいところをさも大切な何かのようにワイワイ議論する、というのがおそらく現代という時代であつて、そこを剥いでシンプルにすること

で物事が随分スッキリする、と思うからです。

小麦料理の決め手は粉で、ここに目を向けない限りコシとかどうでもいいものに引きずられて道を誤り海は逆巻き街は業火に包まれ人類は滅ぶ。

●緑化するぞ

昼過ぎにタールンがまたモンデオ飛ばして迎えに来てくれて、今日は谷の緑化運動の進捗を観察に行きます。

途中、米脂の街中で、あそうそう中国は「市」が「県」よりも大きな単位なのですここは米脂県、で ATMでクレジットカードで現金を下ろそうと思ったのですが、僕のカードは不許可でした。

なんでも一時期スキミングが流行った時に日本で盗んだデータで作られた不正なカードがガンガン使われて、かたつぱしから使えなくしたそうです。もちろん何か手続きすれば大丈夫なようですが、中国行かれる際は「これ持つてるから大丈夫だろ」と頼り過ぎないようにされるのがよいやも。

またこれもきらびやかな、おそらく道教のお寺の前で合流したのは新さん御一族。このへんの豪族の末裔で、山をいくつもお持ち……のようには見えない普通のおじさま達がポロシャツにチノパン姿で、それもそのはず今は皆さん普通の仕事を普通にされてる市井の方で、中心人物の新さんは警察官をされているそうです。

お寺は極彩色。赤・黄・青・緑とにかくカラフル。よく「法隆寺の建立当初の想像CG」なんかがド派手に塗られてますが、もつと凄いです。あれ日本人好みを考えてかなり控え目にしてあるのかもりませんし、中国の方がさらには派手方向に行つてしまつたのかもしれません。朝見た竜王様の何倍かの大きさの様々な神様の像が、並列にわんさかわんさか並んでます。

そうだ、七福神をイメージされると一番近いかもしれません。百福神って感じです。布袋さんや鬼子母神（たぶん）のような日本でもお馴染みの方々も。仏様系の方もたくさんおられます。光背に額に白毫、指で印を結び蓮華座に座りさらにその下には狛犬やガネーシャっぽい白象。いやあ混ざつてますねえ。

いや、ひよつとすると「三教」（儒仏道）全部こみの寺院だったのかな？

椅子に座つた像が多いですが立像や坐像もあります。

建物は二階建てで別棟と中二階で連結するような複雑な構造で、上階にも神様が並んでいるのが日本のお寺との相違点でしょうか。ただ外装はレンガや木で譲魔化しますが作りは遠慮会釈

のない鉄筋コンクリで、このへん合理的。たくさんのがありましたがどれにもお参りの後も新しく、今も皆さんのが信仰を集めておいでのようです。

視察地はその寺院の裏山つてことで、山道を新さん一族の懐かしい二代目VWジェッタで……つてうおおいこんなとこホンマに行くんですか！という、スズキ・ジムニーでも持つてきたいような極細・凸凹・オフロード、これを飛ばす飛ばす。

またクルマの話ですいません、バブル以前は日本車は輸出用と国内向けでいろいろパーツ変えてるつてことが非難の対象にされたりしたものですが、いやこれこんな道日本に無いし、とか、日本人こんなところファミリー小型セダンで突っ走ろうとは思わんし。やつぱり郷に入つては郷に従えですよ。

と、途中で止まつて後ろを見やるみなさん、「後ろがついて来ない」と心配してゐるそうで、つてええつ、こんなとこモンデオじや絶対無理ッスよ！

冗談ではなくごくフツーに

「あれおかしいな来ないな」

みたいな心配の仕方だったのでなんだか感覚が麻痺しました。携帯電話？ もちろん入らない山

奥です。

結局、目的地着いてから引き返してピストン輸送しようということで私と松永さんが先着。そここの平飼い養鶏場にはたいへん立派な鶏たちがのんびり飼われていて、聞くとこここのブランド商品にしたいと開発中のこと。

どこも知恵を絞らないといけない時代なんですねえ。

もちろん事務所的な建物もあつて、ということはここで人は働いてて……あの道毎日往復するのかと思うと人間つて凄い、と改めて思いました。

さて全員揃つて山道をテクテク登り、山頂で開けた景色はまた格別でした。彫りの深い峡谷に人々の生活の匂い、それを囲む山々の穏やかな稜線、たまたまですが天上から差し込む光の束いわゆる「天使のカーテン」も見られ、幻想的……な風景を邪魔するのが、官製植林されたいかにもいかにも等間隔に木々が並ぶなんともかわいそうな山。その横が我らが民間チームが担当した山で、こちらはずいぶん自然に普通に緑に覆われてました。

安富先生に伺うと緑化のキモは

「なにもしない」

ということだそうです。結局、人間がヤギや羊を放牧してそれらが草を食べ、または木を伐りま

くつて使うからハゲて土が砂になつて飛んで砂漠化するわけで、それらを止めればすぐにでも地衣類のコロニーが地表をカバーして保水力を高め、そこにガチヨンのような草が茂り、いざれは木々が生え育つ。

ではなぜそうしないかというと日本でもお馴染みの「こうしました」という決め事・お役人仕事のアリバイづくりであるからで、ある地域などは毎年新聞に「こんなに緑化しています」と笑顔のお役人の写真が載るそうです。

「毎年やつてる」って時点でおかしいわけですし、もちろん下々の者はわかりきつてるわけです
が、まあ、飽きて&予算が尽きて変なことをやらなくなるのを待つ他ありませんな。

「黄土高原」と聞いてウェブなど引きますとグランド・キャニオンのような荒涼殺伐とした土茶けた侵食大地の写真が観られるわけですが、このように想像よりもずっと緑化が、（進んでいるところは）進んでいました。

人間が壊したものですから人間が回復することもできるようです。希望がありますね。

さてその後大きなターミナル駅まで行くのですが、この道が凄い道で、もう。

北方から石炭を積んだトラックが中国各地に散らばっていくその根本のルートだそうで、日本の道ではちょっと見られないような超巨大トレーラーが上り下りミッシリ埋まつてます。特に荷を満載した下りはテイル・トウ・ノーズの数珠つなぎのままソロリソロリと移動してるので、「世界で唯一衛星から見れる渋滞」

の称号が冠されるとか。

しかもまたドライバー達がマイ・ペースな中国人ですから、ある時など一〇〇キロ単位の超渋滞が発生、原因は何かと見れば先頭の二台がトレーラー路上に停めたままレストランでメシ食つてたから、というなんともはや。

渋滞とそれによる空気の汚れにも顔をしかめたのですが、それより顔が歪んだのはこの道路の構成。三車線なのですが下り・追い越し・上りという構成で、つまり追い越し車線は両側から目標を追いかけるクルマがフルスロットルで飛び出しあるいの相対速度を高め合う超ウルトラ危険地帯。

よくこんな凄まじいこと考えるなというか考えても実行するな、と感心したのですが、実際はカタチ上は三車線だけど幅的にはギリ四つて感じで普通車同士なら相対してもなんとかなることと、中国の方はこれは都市部のドライバーたちもそうだったのですが徹底して「だろう」運転

はせずに「何が起きるかわからない」を前提に「全員が」周囲の動きと呼吸を合わせて運転する模様で、だから車線とか順番とかメツチャクチャなんですけど意外に事故は起きない（そりやもちろん日本よりはずつと起きてるでしょうけど）。

またターレン氏は軍隊行つてそこで免許取つたそうで、運転が超上手かつた、のにも助かりました。もちろん最新のモンデオの運動性能にも。最近のフォードの脚は評判いいですね。

駅でモンゴル人のお知り合いの方が来られて、その人と別の調査に向かう松永さんと別れます。昔はこうしてモンゴル商人が毛皮など売りに来たそうです、というか今でも。

それから名産の桃を買いに行つて、とつぶり暮れた頃、懐かしのヤオトンに着。夕食は昼の餃子のタネがまだたっぷり残っていたので新しく包んで茹でてもらつたものと、粟のおかゆ、卵と小麦粉の薄焼きクレープ風に、胡瓜の細切りをまたお出汁で和えたもの。もはや言うもおろかですが、どれもたいへん美味でした。

アワはご当地名産、「米脂」というのはその粟の旨さを表現したものだそうです。

実はこれをビニール袋一袋いただいて、日本に帰つてから西式甲田療法を実践中で毎日基本は野菜をジューサーで碎いた「青泥」をお食べになつてゐる江口友子先生（平塚市議）にお渡ししたところ、生で齧つて

「うまいっ！」

と驚かれました。

甘いんです。とても「雑穀」などという失礼な呼び方はできません。

クレープ風は卵と小麦粉の比率が絶妙で玉子焼きともクレープとも違うふんわり優しいお味。具はネギぐらいだつたと思うのですが、とても美味しかつたです。卵が新鮮なのが効いてるのか、脂があつさりしてるのが効いてるのか……匂いを嗅ぎつけてやつてきたミィー・ミィーが大好物らしく、千切つてあげると延々食べてました。猫は基本的にタンパク質ならなんでも好きですね。

一人部屋になつたので両手両足を伸ばして……と言つても四人横に余裕で並ぶ寝台ですので、ぼつーんて感じで。何事も過ぎたるは及ばざる。

今宵は月は雲隠れ、もちろん星も少なし。

●山の上の葬送

ゆるゆると起き出しますと今朝は奥さん方の家系、常家のお墓のある山の上までお兄さんが連れて行つてくださるつてことでお墓参り。安富深尾両先生とご一緒します。

竜王廟の時のような軽いお散歩かと思つて気軽に行きましたら、都合三時間の道のりになつてしましました。

山への道すがらに「革命記念館」があります。これは後述。ただその所在を示す看板に大きく写されている若かりし頃ここを拠点にしていた頃の毛主席が超カッコイイ。沢東マジ青年革命家。惚れる。

「この頃はカッコイイですねえ……」

「革命後はどんどん狂つた老人になつてくんやけどな……」「秀吉もこうだつたのかなあ……」

なんとシンクロニシティ、そこでたまたま葬列に遭遇しました。ピックアップトラックにまるでパチンコ屋の新装開店祝いグッズのような派手派手な葬儀品を満載して、徒步にて白装束に白頭巾、腰に麻紐を巻いた若い男女が列になつて付き従います。「礼記」の頃から続く伝統の装束のようで、香港や韓国でも、また少し前までは日本の地方でも観られたそうです。

そして小広場ではこれは中華圏冠婚葬祭のお約束、BACK-TICKがけたましく鳴り響きます。いや向こうの爆竹、日本のとたぶん火薬の量違うよ。若干「危ねえ」とか思つちやつたもん。

我々はお墓めがけて登るのですがつまり山全体が墓地みたいなものですから葬列と途中まで御一緒。小学生ぐらいの男の子がその看護師さんスタイルで一生懸命駆けてる姿は微笑ましい。トウモロコシ、アワ、じやがいも、綠豆、ネギなどの畑を踏み越え乗り越え。トウモロコシを支柱代わりにインゲン豆育てる畑にも出くわしましたが、これ大丈夫なんでしょうか。やつてるつてことは大丈夫なんでしょうけど。

途中、やつちやいかんはずのヤギ放牧のおじさんにも遭遇しましたが悪びれるでもなく怒り出しますでもなくニッコリされるのでこつちもニッコリ。

山のそこかしこに、たぶん飼われてるものだとは思うのですがぽつねんと佇む牛がのんびりしていて、またこちらを見るつぶらな瞳。放牧の一種なのかな。

山頂近くのお墓に辿り着きますとこないだ建立したばかりのお墓は大変立派なもので、人の背丈を超える石版に屋根・庇・軒風の装飾があり、一族の名前が多々刻まれ、お兄さんも「いざれ私もここに」となんとなく誇らしそうでもあり嬉しそうでもあります。

お供え物は（おそらく）野生動物によつて散乱していますがまだ新しく、訪れる頻度を物語る。全体的に中国の方はこういう「散らかり」には無頓着ですね。むしろ人の気配つてことでウェルカムっぽい。

どんどん墓とか血縁とか葬式とかめんどくさいとか物理的に不可能だとか言い出してる日本人からしますと、やつぱりちょっと羨ましいような気もします。

なんといつてもそこは山頂、見渡す限り自分が生まれて育つた風景を眺めつつ眠りにつけるわけ。日本でも地方によつては昔はこうでした。

安富先生まで「死んだらここに埋めてほしい」と言い出す始末で、「墓参りできないじゃないですか」と諫めつともお気持ちはわかる。

でも日本にそういうの再輸入というか再発見すると靈峰のいい場所はオーケーションとか言い出して……オエッ。

僕ですか？

もう火葬場からダイレクトで一心寺に収めてもらつて骨大仏がいいかなあ……：

両膝をつき、手をついて挙げて三度拝む。

お兄さんに引き続き両先生ももちろん僕も、お参りさせてもらいました。
両家の繁栄が続きますように。

件のお葬式もたぶんすぐ近くだというので連れて行つてもらいました。

途中、そこかしこに各家のお墓があります。

尾根の一番高いところにその家の祖が建て、子孫や分家はそこから下へ扇形に下つて建ててい
くそうです。

ということで一番てつぺんにあるのが一番古いお墓なわけですから、ぽつかり盗掘されている
ものも。

盗掘は中国学術界でもたいへん頭の痛い問題だそうで、北京の古物商・古美術商から、「これ
絶対盗掘品」というのがなんぼでも出てくるんですって。

でも、盗掘されたからこそ貴重な現物がそこにある、とも言えるわけで……

途中常家の畠も見せていただきました。人の背丈ほどの立派なアワが育ち、その畠で撮つたお

兄さんと深尾先生のツーショット写真は今回のベストショットの一枚です。

さて着きますとなるほど葬儀もたけなわ、男たちがシャベルを奮つて巨大土饅頭をこさえます。それを踏み固めるのは例の看護師軍団で、女達がいくつもの巨大花輪を筆頭に装飾品を山のように飾つていきます。見れば家、クルマ、輿、「蓬萊の玉の枝」のような黄金の木、それに觀音様か弁天様かはわかりませんが女神様。あともちろん現金。などなど紙製のおもちゃいや副葬品が山盛りです。大きな竹カゴに花飾りをしてラメラメに塗つたもの、天蓋のような吊るし飾りもの。BGMはチャルメラの演奏、こちらはお金払つて呼ぶプロだそうで、それら葬儀全体を差配するのは「風水先生」と呼ばれるこれもまたプロ。なにかお経のような聖書のような書物を、仏具でいえば独鉛のような何かを振り回しながら朗読されました。

なかなか明るいお葬式なのですが、こちらでは実は葬儀式次第の「ここで泣く」っていう脚本というかタイミングがあるそうで、みんなそこで一生懸命泣くのでそれ以外のところでは泣いてられないそうです。

おもしろいですね。

それはこの三教文化圏では割とスタンダードな習慣らしくて、だからあの北朝鮮の映像で「我らの首領様がー！」て絶叫して号泣しているのは「そういうタイミング」だそうです。あと子供

の頃からそういう習慣慣れしてると任意のタイミングでスイッチ入れられるようになるんですね。

我々はテレビによつて何かいろんな物を観た気になつてますが、このように「切り取り方」が恣意的であれば何も観ていなか、むしろ間違つたものを観てことになり、非常に危険だなあ、と改めて。

そんな雰囲気でもあり、またメンタリティ的にも特に気にならないのか、こちらがまるで参列者のような距離で見学してもカメラやビデオを回しても全くノープロブレムむしろウエルカムにして、深尾先生のインタビューにこやかに応える音楽家の方が印象的でした。

クライマックスは爆竹の音色と共にそれら紙の飾り物に火を点けて燃やす。乾燥しているからか瞬く間に激しい火柱となつて盛大な煙を上げ、燃え尽きました。

これも何かの縁、どうぞご冥福を。

ここで本当は墓に対して後ろ向きになつて白装束を脱いで放り投げて葬儀終わり一区切り、だそうですが、最近は白衣使い回すそうで皆さん着て帰られました。時代とともに。

下り道でも参列者の方がフランクにどこから来たんだなにしに来たんだと語りかけてこられて、まあ葬儀というのはホントはこの「野辺送り」こそがメインイベントで無けりやおかしいですよね。

ウチ父方の田舎が伊賀（上野）ですが、土葬とか男手で棺を担いで野辺を……となると一〇年前ぐらいにはすっかり無くなつてましたねえ。いろいろと思い出すことの多い旅です。

●ハバブレーク

帰着しますと時間的にブランチになりました。

今日はじやがいも料理。

じやがいもを摺り下ろして、調味料を混ぜ込んで、蒸して、炒めたものです。炒める時にピーマンやネギも一緒に。

これがまた超旨い。

毎回で下さいません。

粉モン風でもあり、一回擦つてるので澱粉化してぷにぷにした食感があるのはパスタ的でもあります。さらには塩味が絶妙。

これはほんとに日常食らしくて、食べてるところを見かけて「美味しいぞだからそれを食わせてくれ」と言つても「お客様に食べさせるようなものじゃない」となかなかウンと言つてくれるなかつたとか。そのへんも粉モンに似ていますね。

それに自家製採れたてカボチャ。こちらは地面を這わせるのではなく棚で作つてました。瓜ですもんね。だからか形がいろいろイビツになつてて、おもしろかつたです。

これをトウモロコシもちろんこちらも自家製、と一緒に煮ると、ゆで汁がほんのり甘いスープになるのです。これがまた先ほどのじやがいもの塩気と抜群のコンビネーション。

いろんな料理をいただきましたが特にこのじやがいも料理はここでしかいただけないような気がします。日本でもレシピが広まれば十分ウケると思います。特に子どもに人気が出そう。

トウモロコシは最近の日本のスイートなそれとは違つて粒がかなりモッチリしてたので、古い品種かもしれません。あのスイートコーンというのは澱粉より糖分が多くなるように改良されたもので、僕が子供の頃はまだこういう「穀物」っぽいトウモロコシが主流だつたように記憶します。

夏祭りの屋台でお醤油掛けて焼いてあると美味しいのはこつちですよね。

トマトは桃太郎以降の甘い物のほうが万人好みだと思いますが、トウモロコシに限ってはこの系統を好む人も何割かいらっしゃると思いますけども、いかがか。

歩き倒してお腹も膨れたのでちょっと昼寝して、梨を齧りながら深尾先生買い置きの高価な中国茶をガバガバいただくアフタヌーンティー。

ご当地残念ながら水はダメで、井戸水なのですがどうやら農薬や肥料がそのまま流れ込んで一時はCOD（化学的酸素要求量）が二〇を超えるという（日本の基準では一〇を超えると下水エライことになつていたそうです。今は人口の減少に従つてかなり改善されたそうですが、それでも慣れてない我々は口にする水はたとえ歯磨き用でもペットボトル、ということで各ヤオトン内には五〇〇mlが二四本運び込まれていました。

しかし乾燥していることもあり、特に僕は水飲み星人なので一日五本近いペースで消費しちやつて、最後まで持つのか不安な気分。

その分果物、特に水気の多い西瓜や梨で水分を補給すればいいのですが、慣れてないものでフルーツ感覚が抜けません。おかゆが多いのも消化に良いのと同時に水分補給の意もあるのかもしれませんね。

王傑さんのご専門は思想史。中でも李卓吾の研究では、彼の論敵にしてパトロンという立場の友人と交流を仔細に観ることで、彼の思想に迫る論文をお書きになつたそうで、安富先生が「これは古来初めてではないか」と激賞されました。

古くて有名人ほど後世の人間が「これはもう確定していることに違いない」という思い込みで見てしまうもので、重要な勘違いや取り違えが延々と続き、続けば続くほどその思い込みだけが根拠なく強化されていきます。

わたくしあるMMORPG、ネトゲですね、を「丸一年その世界で過ごしたことになる」ぐらいは凝つてプレイしてたのですが、最盛期には同接二〇万を誇ったそのタイトルでもウェブ上の有志が運営する「情報サイト」というと二つほどしかなく、しかもその両者が当然お互いの情報を参照しながら更新しますので、「どちらかが一度間違えただけで二〇万プレイヤー全員が間違つている」という事態に、無視できない頻度で陥りました。もちろん修正されることがほとんどなのですが、旬を逃した場合、修正圧力も弱くなつてそのまま放置されることもあります。

情報の精度というものは、正解が存在してかつ二〇万の人間が鵜の目鷹の目で見張つてもそんな程度のものですから、まして「古代の偉人の思想」なんてそこら中に思い込みと取り違えが散りばめられていると考えてもいいのではないでしようか。

李卓吾という方は、前半生を極めて真面目な科挙エリートとして四角四面に生きた方なのです

が、祖父の喪に服するということで故郷に帰つて当時の厳しい儒教ですから丸三年、明けて我が家に帰れば二人の娘が餓死しており、そこで「下駄の歯がポツキリ折れ」たような気持ちになって後半は激烈な反骨思想家として孔子にさえ牙を剥き、最後は投獄され自害させられ禁書にされ著書の版木を焼かれた、でもなぜか現代に至るまで脈々と読み継がれ続けた、そういう凄まじい哲学者です。

「童心」という人間が生まれながらに持つてゐる自然な感覚を大切にせよ、さもなくばワシのようないに「假」（にせ）の人生を送つてしまふぞ……：

このへん安富先生の『合理的な神秘主義』（青灯社）からの受け売りでござります。

吉田松陰が読んで感動したりと（いかにも松陰が好きそうな人物ですね）一時は日本でもメジヤーな思想家だつたようですが、江戸期および幕末の反動からか十把一絡げで儒家ポイーな現状では省みる人が少ない模様で、たいへんもつたいたいですね。

そうそう、お風呂事情はまだでしたつけ、こちらのおうちでは残念ながら湯船は無くシャワーホールです。中国の地方部では太陽「熱」温水器が盛んに使われており、日本人研究者が頻繁に訪れるこのおうちにも設置されておりました。ヤオトンではなくて、厨房と納屋とシャワールームが並ぶちいさな建屋があるので、その屋上に。

確かに景観的には残念なのですが利便性には替えられません。日本の最新式のような電腦仕掛けで一℃単位で温度管理、なんてわけにはまいりませんで、時間とともに温度下がつたり水圧が上下したり操作そのものがアトラクションですがまあそれも旅の楽しみ。熱い湯が、出ることもある、で十分です。

太陽熱温水器は原理上枯れてしまつた技術なので効率的には限界があるのですが、それでもなお、いやそれだからこそ、現在でもかなり有意義な省エネ・低炭素装置で、夏など「ガス使わない」まで追い込めるそうです。最近のモデルはガス湯沸し器に系統接続できて、そちらの温度管理に乗つかることで使い勝手的に特別な気を遣わなくていいようです。

オール電化で金掛かる上に運用不安があるのであるのがあの給湯・貯湯系で、あれで二の足踏んでる方も多いかと思いますが、ガス代節約ならこの手もありますぞ。新築をお考えの際にはいかがですか。

●寨子

さて、一息ついたところで例の「寨子」現在の革命記念館を見学に参ります。（Googleマップ

にも載つてますよ）元々はこの地方の豪族、馬一族が北方との交易で大儲けをして一九世紀につつ立てた大豪邸だそうで、のちに長征中の毛沢東率いる共産党軍に根拠地として提供されたとか。ここで「よし北京を目指して反撃に出るぞ！」という契機になる会議が開かれたそうで、共産党にとってはとても意義深い場所だそうです。

（記憶適当なので嘘ついてたらごめんなさい）

両先生と王さん、そしてファーファも一緒に歩き始めたのですが、すぐご近所のお家のスロープを、ああ言い忘れましたが各ヤオトンは山肌を削つて建てるために道から山をいくばくか登つたところに建てられているのです、そこを腰を直角に曲げたおばあさんが両手荷物でヨレヨレと……思わず手を貸す一同、おばあさんをお家まで送ります。

「卵が安くて思わずたくさん買つてしまつた」とのこと。

息子さんなど家族は別の場所にお住まいでお基本的には一人暮らしだそうで、高齢化社会・核家族化社会の難題はもう中国にも押し寄せてています。

御年九〇歳でズバリ「毛主席が来たことを覚えている」方で、それやこれやで深尾先生はそのままお話を聞くことに。三人と一匹で毛要塞を目指します。

「つてファーフア連れてて大丈夫ですかね」

「怒られたらそこで繫ごう」

「へーい」

道行くとみんなこつち観るのはアウトドアorスポーツ・ボーテイルックの珍しい日本人らしき一行、ていうのもあるのですが、前述のように「犬の散歩」がとても珍しいそうです。

さて砦の門の前ではコツコツとノミで石の加工をされてるおじさん達が。改修に使う石ですが、素材は運んでくるものの加工は現地でするようです。要塞の中でも作業されてる姿を見ました。表面にくさび形のノミを入れるのですが、これが飾りというか手間を掛けた証ということで「いい」ようです。日本の玄関先なんかと同じですね。

石を運んでくるのはオーブンデッキの三輪トラクター。日本では見ない乗り物です。軽トラ的な乗り物・貨車だと思うのですが、悪路・高荷重対策に後輪が大きくゴツく、荷台も頑丈な一体型鉄の箱。クルマもそこそこで進化するものです。

要塞は敷地的にはかなり大きくて、日本のちよつとしたお城……岐阜城とかあのへんの規模感をご想像いただきたい。ただ建物はそんなに高いものや広いものはありません。元々邸宅ですか

ら小さな広場とそこに建つ建物をスロープや階段で複雑に結ぶ構造です。

なんと小学校まであつたそうで、実際そこはかなり近年まで使われていて、路傍に使われてたと思しき古びた教科書が落ちました。

ただそのような成り行きですので建物そのものはそんなに目を引くような立派だつたり古鏽びていたり、ということではなく、また、はなから戦闘要塞として作られたものでもありませんので珍しさもカッコよさもなく、観光地としては正直微妙かなあ、などとお城慣れした日本人は思つてしましました。

入場料的なものはどうも取らないみたい。

メインの建物にはど真ん中に毛主席と江青さんの寝室があつてヤオトン式の広い寝台にお布団を二つ並べてあるのが中国式リアリティ。それを観て王さんが顔をしかめて

「江青大嫌い」

と吐き捨てたのが印象的でした。まあそりゃあそうですね……日本で言うと誰に当たるのかな、つて想像もつきません。淀君？ 富子？ いやあなんか違いますよねえ。

代わつて周恩来の居室は西洋風の脚付きベッドに書き物デスク、この人はどんな時でもスマートだなあ、と感心しました。

やつぱり、史上に残る名コンビですよね。

そのメイン広場から細くて長いトンネル階段を延々登ると、見張り台のような小広場に出ます。

ここが絶景で、思わず売店でビールを買い求め景色を肴に一杯やる我々。

なんでもここは「龍の背」と呼ばれる山の尾根が九本集まる場所で、風水的には素晴らしい場所なのですが、「普通の郷土が生きるには気が強すぎる場所じや」とのことわざわざ一本外して建物を建てたそうです。

もし九本集めたところに建つてたら文革とか無かつたんですかね。

さしものファーファも歩き疲れたのか砦頂では丸くなつてうたた寝してました。

ビール美味しいですね、ということで帰り道にある、バス停前の村の売店（この風景が結構懐かしい）で一ケース購入。

中国では小さなブルワリーを有名な「青島麦酒」が買収しまくつておられるそうで、昔飲んだあれもこれも買われた、と先生方嘆いておられました。

ただコントロールはまださほどキツくないようで、味はブランドによつてだいぶ違うように思いました。

基本的に常温で飲むようで、それに合わせて作られているからか、はたまた基本的に乾燥して

るからか、とても美味しいです。アルコール度数も六%などしつかりあるのに、ほとんど酔いません。古いアメリカ映画なんかで、でかいコンバーチブルをバドなど煽りながら運転したりする様が描かれますが、あれたぶん全然大丈夫なんだと思います。

ちようどいい気候なので早めの夕食はお外にテーブルを出して。

こちらでは食事作法みたいなものは日本とだいぶ違い、たぶんいろいろあるんだろうとは思いますが立つて食べたりしゃがんで食べたりウロウロしながら食べたりは全然OK。丼を日本式お茶碗持ちではなくて、下から包むように持つと、たいへん安定して食べやすいです。そういえばジャッキー・チエン（の映画）とか御飯食べるときそんな感じだつた気がする。

今宵のメニューは野菜づくしで、

- ・インゲンのニンニク炒め
- ・トマトスライス・ザラメ掛け
- ・肉厚ピーマンと卵の炒め
- ・もやしとじやがいものトマトニンニク炒め
- ・唐辛子と豚肉の炒め
- ・セロリと豚肉のピリ辛炒め

これを粟入りごはん＆粟おかゆでいただきます。

言うまでもありませんが、超美味かつた。どれも美味かつた。

野菜はやつぱ「採れたて」にかなう味無し。我が家でも夏はグリーンカーテンにゴーヤとキユウリを育てるのですが、もぎたてを炒めたり和えたりするとたいへん美味しいです。

今日はここに先ほど入手したビールと、知恵さんが持ち出してくださった白酒（パイチュウ）を。銘柄は「茅台」で貴州産の高粱を原料とする蒸留酒です。アルコール濃度高く味よりは薫りを楽しむスピリッツ系。ちいさなお猪口でクイックといたします。周恩来は風邪を引いた時、この茅台酒を飲んで治したとか。

これがまた野菜の炒めものによくあつてて、ススムススム。

私達は居酒屋で味の濃いものを冷たいビールで流し込む文化に慣れ親しんでいますが、あつさりしたものをお湯のビールや強めのスピリッツでやつつけるのもかなり良いものです。

中医（中国医学）の先生が日本に来て驚かれるのは「冷たいものの摂り過ぎだ」とことらしく、胃腸どころか身体全体によくないそうですね。僕もほおつておくと冷たい物グビグビいつちゃう方なので、意識してホットを多めにしています。

夕食後はデッキチエアを庭に出し、月と雲を観ながらビールちびりちびり舐めてのんびり。

極楽。

この折り畳みデッキチエアも深尾先生たちが街で買い求めて置いてあるそうで、確かに現地の人達にとっては「なんでわざわざ庭で上向いて寝たいのか」という感じでしょうか。価値というのはホントに相対的なものです。

そんなこんなで随分夜長を満喫してそろそろ冷えてくるからとヤオトンに引っ込んで時計を見ると一〇時二〇分ぐらい。

ネットやテレビが無いと夜は長い。

テレビあるのですが我々は観ませんでした。テレビがこのヤオトンにやつてきた当初は、やっぱり家族が全員で齧り付いて観ていたそうです。どこでも同じですね。

ネットも電波はバリバリ入ってたのでローミングすれば使えたはずです。

もうたぶん地球上ども言つても追つかけてくるTwitter・Facebook。意識して逃げないと。

今朝も六時半には起床。日本では超不規則カオス睡眠な僕がなぜここに来るとこんなにも規則正しく。つまり

「規則正しい生活をしよう」

というのは間違いで、

「規則正しい就寝起床時間になるような生活を構築しよう」

が正しい。因果関係が逆でござる。子供の頃からずつと言われてたんだけど大人みんな間違つてんじやんブツクサブツクサ……

と。ポケーと景色眺めていましたたら深尾先生が出て来られて開口一番、

「ながたさん！ 夢を観たの！」

「出た。どんな夢ですか」

「ながたさんが『いやあちょっと大当たりして一億四千万稼ぎましたよー』って夢！」

「それ僕がカラオケでヒロミ・G.Oの『二億四千万の瞳』歌いまーすつて夢じゃないですか」

「違う違う！ これは当たるから！ ヤオトンには不思議な力があるんだから！ 私の夢見は当たるんですよ！」

「そんな大阪のおばちゃんみたいなこと言わんといてください」

「大阪のおばちゃんやもん」

「いやそうですけど」

安富先生も出てきて、

「当たつたら研究費欲しいなあ」

「出します出します、ナンボでも出します」

不思議な力、期待します。

知恵さんが鉄担いでヤオトンの横道を裏山に登つっていくのでなんですかと尋ねれば煙突の煙道がどうも調子悪いので見に行くのだ、と。

ヤオトンの屋根は土で覆われてますので自然と草木が茂るわけで、そこに設けられた煙突がそれらで塞がれてしまうことも多いようです。もちろん工夫なくぽつかり開いてるわけじやなくてレンガを使つた覆い構造はあるのですが。こちら雨季の雨量は物凄いそうで、それで土砂も溜まるのでしょう。

屋根に上るとミイー・ミイーのライバルらしきキジトラ猫発見。「見たことない顔だな」的な不思議そうな顔で見られました。

煙突の近くにはこれは山肌繰り抜いて小さな洞窟が掘られており、物置だ、とのこと。

朝食はそうめん風のつるつる細麺。たぶんそうめんだと思うんですけど、作り方とかわからないので断言はできません。スープはネギなどの野菜に例の四種スパイス（生姜・花山椒・クミン・茴香）のあつさりタイプでポーチド・エッグで景気付け。そうめんと言えばカツオとコンブとお醤油一辺倒の我々には少し目先が変わつて、これはこれで美味しかつたです。お馴染み五種トップピングで味を変えられるのも。そうめんもトマトペーストが合うんですよ。

ボリューム足りない方にはキビおかゆもありますよ、と。キビのおかゆも美味しかつたです。アワがねつとりした脂っぽい旨さだとするとキビは香ばしい感じ。

キビは品種によつては膨らんでもちもちした感じになるものもあるようですが、こちらではサ

ラサラキープでした。

どちらにしても「ホツとする味」ですね。

なんでも現在中央政府はその名も「農村消滅」というスローガンを掲げて農村から人間を引き剥がして都市化するという、それをやつてエライ目真つ最中の日本人からすると「止めなさいつて！」と真剣に止めてあげたくなる政策真つ最中だそうで、村からも子ども達の声がすつかり消えてしまつたそうです。

確かに子どもの姿を見ません。

この家の息子・娘も、できれば村に居たいんだけど村には仕事が無いから……と街に出ているそうです。ほおっておいてもそうなんだだから何も無理に誘導する必要無いと思うんですけどねえ。

昨日は深尾先生が来られなかつたのでもう一度寨子へ出かけてみました。もちろんファーファも一緒です。前日見なかつた居室用のヤオトンなどを巡ります。

辛く厳しい長征で心身共にボロッボロだつた毛沢東たち共産党軍も、ここにヤオトンで寝泊まりして現地名産の粟を始めとする農作物をたらふく食べてグングン体力を回復しガツツを取り戻したそうで、いや人間基本は衣食住ですなあ。

古い欄間の見事な細工なども見ました。

一九世紀にバスケットコートがあつたと言う大豪邸だつた往時が偲ばれます。

一角の補修工事現場で、人夫さん達向け炊事場がありそこで顔見知りのおばさんが飯炊きパートをされてて、「いやー久しぶり葉子ちゃん!」みたいな感じで我々もあずきおかゆをご馳走になりました。

おばさんに聞いた「地元の星」の超頭よかつた男の子の話。家庭環境は苦しかつたそうですが、本人が超がんばつて周りもできるだけ支援して、いま超エリートコースに乗つてゆくゆくはかなりエライさんになれそうな予感、と。

そういうえば戦前戦後すぐぐらいまではそういう「故郷に錦」みたいな話は日本でも聞きましたよね、地元の神童をみんなでよつてたかつて地元の名士がお金出してあげたりして東大にズチ込んで高級官僚か大博士にして。

しかしそうやつてエリートとその予備軍に社会的責任感を背負わせる・感じさせるをしても日本エリート達は太平洋戦争にまつしぐらに突つ込んでつて国滅ぼしたわけで、それ式がええかというとなんとも言えません。そういうえば近現代史の加藤陽子先生が爆笑問題さんとのTV対談番組で

「今の若者観るとほやーんとしてるけど、悪いことはできなさそうだとも思う」とおっしゃつて、責任感や使命感などいうものはそれそのものとして方向性別に持つてませんので、使い方間違えると悲劇です。

しかし中国は、いくら一人っ子政策で子どもが少ないといつても母数が違うので、そのように成り上がっていくにはおそらく（その頃の日本と比べても）言語を絶するような壮絶な努力が必要で、まさに「科挙」の伝統というか、あの子どもが机に齧りついている超不自然な姿を喜ぶメンタリティはあれなんなんスかね。これも東アジアに根付く妙ちきりんな「癖」だな、と思います。

そうやつて優秀な官僚を育てれば育てるほど官僚機構そのものが制御不能な暴走ロボットとなって暴れ回り王や議会など意思決定機構を乗つ取り国を滅ぼすのは東アジアに限らず古今東西何度も何度も何度も繰り返されることなのに、人間はすぐこの官僚システムに依存する悪癖から脱することができます。

SFでよくマザー・コンピュータが支配するディストピア幻想が描かれますが、暴走官僚機構よりは最近ならコンピュータの方がマシじやないかと思うほどです。

要塞には一時観光地化しようとしておつ立てられた現代風のプレハブも一棟あつて、実に景観
ブチ壊しのいい建物でした。

ほれご覧。

降りて来てパツタリ出会いましたのが、これまた九〇歳を超えて毛沢東を知っている、いやいやそれどころか、ともに民兵として一緒に戦った「革命老人」。もうさすがに男性はほとんど残つてないそうです。

杖はついておられましたが意氣軒高、「I. (ハート) · CHINA」のTシャツに誇りを感じます……つて政府に貰つたので着てるだけ、とのことですが。「家に来い」とのことでお話を伺いにお邪魔いたしました。

壁には偉い人が訪れた時の写真がたくさん。毛主席のこの地方での足跡を書いた書物などをデジカメで簡易コピーさせてもらいつつ、ひ孫さんにスイカをご馳走になりました。細くて長い脚が眩しい、スタイル抜群まさに米脂美人のひ孫さんには可愛い赤ちゃんが居て、つまりやしや孫さん。旦那さんは深センで働いてらつしやるとか。もう少し大きくなつたらそちらへ行くんだけど、そうなるとおじいちゃん寂しくなりますね、なんて話をしてました。こちらのお宅はネットワークが広めみたいでおじいちゃんは入れ替わり立ち代わりで見ていくう、との予定だそうです。が、革命老人にもまさに「農村消滅」の波が来ているようです。

「こんな老後送るために革命に参加したんとちやうんやけどなあ……」
とおじいちゃんがため息つかないで済むことを祈ります。

王さんと一緒に三人で記念撮影してもらつちゃつた。

だつて「革命戦士」つてカッコイイじゃないですか！

●流れに乗る

そしておうちに帰つてお昼は出ました豚まん！

最早皆さんご存知だと思いますが関西では「肉」というと普通牛肉を指すので豚肉メインの肉
まんのことは豚まんと呼ぶのです。

……て豚ですよねこれ。羊？牛ではなさそうなんですが……油断すると馬とか驢馬という
可能性もあるので……でもたぶん豚です。

といいながら、タネは餃子の時もそだつたのですが肉気は少しでベースはお野菜。肉の苦手
な王さんのためにオールお野菜のベジタブルヴァージョンも。

もちろん、語彙少なくてすいません、超おいしかつたです。

特に今回はレギュラー・トップピングスの存在が大きくて、飽きずにすみます。しかし、こちら

のお料理には一切文句言つてこなかつた私ですが、この時ばかりは、この時ばかりは辛子とお醤油が欲しかつた……せつかくこんなに美味しいのに！

しかしこの時以外は本当に、まあトップングの威力もあるとはいえ、醤油塩ソースマヨネーズ、何も欲しくなりませんでした。

豚まんだけでは喉がつかえる場合には、定番アワおかゆも。そしてすっかりレギュラーに定着した昼ビール。

嗚呼今思い出してもヨダレが出ます。

この豚まんで頗著にわかつたのですが、我々関西人は豚まんというとまず「551蓬萊」の地下鉄でよく異臭テロをやつてるアレを思い浮かべるのですが、もちろん僕も大好きでしょつちゅういただくんんですけど、というか関西（特に大阪）のご近所付き合いには「豚まん経済」というのが回つてまして豚まんのやりとりで親密さを構成するという風習があるのですが、あれつても美味しいんですけど

「一発で倒してやる！」

という鼻息の荒さがあるんですね。

すると、そう何個も何個も食べられないんです成長期の体育会系男子でもない限り。ところがこの日ってきた豚まんは美味しいんですけどそこまでの「圧迫感」が無くて、である

がゆえにいくらでも食べられる。

「女人の人551を三つとかなかなか食べないでしょ？」でも王さんモシャモシャ食べてました。
僕は何個食べたかな……四と半におかゆとか、そんな感じです。

これってすごいだいじなポイントだと思うんです。昔から「飽きのこない味こそ至高」なんて
言いますがそういう「味」があるんじゃなくて、「姿勢」のことじやないかな、なんて。

食事時にはいつもやつてきてくれるようになつたミィーミィーに中身をあげると美味しそうに
食べてました。ネギ・ニラ入つてるのでどうかな、と思いつたが鍛えられてるようです。

お昼の後はシエスタに限る。

ちょうどいい気温と日差しだつたのでデッキチエアを三台持ち出して川の字になつてうたた寝
る両先生と王さん。
めちゃ気持ちよさそう。

「これ写真撮つて『これがフィールドワークの実態だ』つて文科省にチクリましょう
「ハツハツハ、今年は全部自腹だから何も怖くない！」

「ながたさん早く二億四千万当ててー」

僕は別の椅子に座つてボンヤリしてたのですが、知恵さんが横から「ちょっと動かないで」というゼスチャーをしてそーと僕の向こうに手を伸ばします。その手にはお箸。そちら見ますとサ・ソ・リ。

キヤー。

蠍はこちらの名産らしくて、昼間は日本の家電回収車よろしく「サソリ買うよ買うよー」ってクルマが回つてますし、夜は「サソリ取り」の人たちが山肌を蠹きます。黒い山腹を二条・三条の懐中電灯が光るからわかるんですね。で、家の犬達が「お前なにもんだ！」と吠えまくる。これが夜のこちらの風物詩。

ちよつと大きめのケース一杯に、だからそうですね数にすれば百とか二百とか、いやもつとでしようか、で、日本円五千円ぐらいだそうです。漢方薬の原料のようですね。

知恵さんは慣れた様子でポイッとそのへんにあつたガラス瓶に……てこれサソリ入れかー！何匹もカラカラになつておられるわ……

蓋も無いですがガラスつるつるなのでサソリは逃げられないそうです。

今まで幾多のこのフィールドワークに参加した日本人の皆さんが「サソリの洗礼」を浴びてい

るそうで、さすがに刺された人は何人もいないそうですが僕のように至近距離で「ギヨツ」というのはよくあることだそうです。

一度などはどこかで付いたそれをクルマで発見して車内がパニックになつたとか。刺されると死ぬわけではないですが一日半ほどのたうち回るぐらい痛いそうです。もちろん巨人に腫れ上がり付き。

もし至近で見つけたらサソリめがけてフーッと息を吹きかけると、身を固めて例の尻尾を掲げた戦闘態勢を取るので、その隙に逃げるとか。

そんなん無理ッスよ（泣）

『水曜どうでしょう』で観たのですが、アフリカのセレンゲティ国立公園のド真ん中にお宿があるのですが、敷地内に平氣でライオンとか入つてくるんです。で、そういう時どうするかつていうと

「渡した笛吹いたらガードマン来ます」
吹けるか!!

虫（や猛獸）と人間との鬭いは永遠に続くのです。『ナウシカ』のように。いやナウシカは闘つて無いって。

そうこうしますとお昼は終わつたのに厨房が慌ただしく。覗きますと薄切りのじやがいもを揚げています、そそのとはポ・テ・チ。

なんでもこちらに小さなお子さんが来られた時にふと「ポテチ食べたい」と言い出したのがきっかけで、じやがいもスライスして揚げるだけだからご当地でもできるでしょう？ やつてみましょう！ てなことで作つてみればこれがバカウマ、とのこと。

起き出した先生方とまたお茶をガバガバ呑んで揚げ上がり待つてますと、知恵さんが持つてきてくれださつたのはご当地ブランドに仕立てあげようと目論んでいる、林檎エキス＆梨エキス。現地無農薬の素材を使い、レシピは大阪茨木でビストロを開いているヴェテラン・フレンチ・シェフの中西さん。

後日お店にお邪魔してランチを頂いたり、イベントでジビエ料理を頂いたりしたのですが腕は確かです。

イメージとしてはミキフルーンとかあんな感じのトロリとした粘度の高い黒色に近い液体で、これを紅茶・コーヒーに入れるもよし、パンにそのまま伸ばして塗るもよし、甜麺醤代わりに炒めものの甘み出しに使うもよし。

梨はのどに効き、林檎は疲労回復に効くのですが、どちらも美味しいです。林檎が甘めで梨があつさりめ。でも好みかな。

ワイワイ言いながら紅茶やコーヒーにどぼどぼ入れて楽しんではますと、揚げ上りました自家製ポテトチップス。

ひやー・旨い！

まあ、ポテト料理は熱々だとなんでも三倍旨いのですが、例の四種スペイスと油のマッチング、それに元々のジャガイモも日本のものと少し変わつておいしい。

最近でこそ「キタアカリ」や「インカのめざめ」が市民権を得つつありますが、育種業者さんによりますと日本では「男爵」と「メークイン」が強すぎて他の品種は出しても出しても売れなかつたそうです。原産地南米では何百種類もあるそうですから、こちらの品種も日本では食べられないものなのかもしません。

これ冷めても美味しくて、ジップロックに入れて持ち歩いて一日後にレンジで温めたんですけど、それでも美味しかつたです。

驚異的。

そんなことやつてますとこの旅の象徴的な出来事が起きました。

朝方「水ちょっと足りないねー」「節約しなきやいけませんかね、それとも買いに行きます

か？」なんて言つてたんです。

するとこの昼下がりに、深尾先生の元に留学してゐる学生さんのお父さん、この方が西安のえらいさんで、「息子がいつもお世話に」と配下の者をよこして、水とビールを二ケースずつ抱えてやつてこられた。ばんざーい。

これがその「流れに乗る」ということで、この地では本当にこれが効く、というか、働くのです。

私達は普段、目標を持ち計画を立て意志を強く持つて課題に立ち向かえ、と幼少のみぎりより教えられ叩きこまれそうやつて生きている、つもりになつてゐるのですが、実際の所人生とは阿弥陀様の思し召し、そんな、人間のそんなしょーもないジタバタなど大自然の摂理・因果の理・縁起の綾に比べれば蝙蝠の斧でござります。

「きっと、うまくいく」

そんな感じで。

さすがに「龍背の地」らしくこの「流れ」は加速し、昼ごろに深尾先生が
「お兄さんのチャルメラ聴きたいねー」
なんて言つてましたら

「じゃ友だちと演るか」

から

「どうせなら秧歌（ヤンガー）やる？」

「そうしようそうしよう」

というのが村中につつとという間に広がつて、

「夕方五時半から公民館広場でヤンガー開催」

と相成りました。

あ、ヤンガーというのは中国で事あるごとに行われる舞踊のことで、盆踊りが突然的に行われるものだと思いねえ。日本でも昔は地方によつてはやつてたそうです。

そうと決まれば、つてもんで急遽ルオリンさんの秧歌講座が始まつて、深尾先生と王さん、それから僕も見よう見まねで練習します。ステップは四拍で三歩で十字切つて一步で元へ戻る、その繰り返しなのでちょっと慣れればまあイケそうです。手には派手な螢光色の傘ひらひら飾りつき（ヤクルトスワローズ東京音頭）を手首スナップで振り乱すか、極彩色の傘ひらひら飾りつき（ジュリアナートウキオー）をエツサホイサと上下する。こちらは適当でよろしいご様子。

で、列になつて練り歩くのですが「隊列を抜くアクション」というのがあつて、これが難しい。文章にするの大変ですがやつてみますと、一人が止まつたら、後ろの人がその人をくるつと回

る、さらにその後ろの人がその隙に二人を追い抜く、追い抜いたら止まつてた人と回つた人とがその後ろに付く、という感じ。こう書くと簡単ですが、実際の隊列の動きの中では自分が一番二番三番のどこを担当しているかパツとわからなくなり、しかもその動作中にさらに追い抜きが発生して入れ子（枝分かれ）みたいにもなり、しかも列が円を描いてますとマンデルブロ集合みたいになつてハーツ！今どこー！となります。

といふか僕なりまして。

実践でコツを掴めばそんなに難しいことではないと思うのですが理屈聞いただけでは理解し難いものでした。

そんな練習をしてますと安富先生が唐突に、

「ながたさん……それ同じ服ずっと着てるの？」

「はい？　あいやこれ実は似たような服が四枚あります。毎日替えてるので清潔ですよ」

黒と紺のTシャツと長袖シャツを都合四枚持つて行きました。ご当地に着いてからはルオリンさんが洗濯してくださるので毎日替えてます。（パンツと靴下は自分で洗いました）

「でもいつもそれじやつまらなくないですか？」

「いやあ別に……僕あんまりこだわりなくて」

「そもそもなんで似たようーな服ばかりなんですね？」

「いやあ……億劫だからですかね」

「億劫？」

「これなら選ばなくていいじゃないですか」

「はー」

僕名作『純情パイン』でヒロインがクローゼット開けると同じ服ズラーツと並んでるってシーンはマンガ・アニメの「それは言わない約束でしょ」を鋭く突いた名シーンだと思うんですが。

「それじゃダメですよながたさん！ 服は大事よ服は！」

深尾先生も参戦だー。

「とか言いつつ我々も昔は酷いもんでしたが。この人は『ミドリガツパ』みたいなモッコモコの防寒着で全身を覆い」

「ミドリガッパー」

「そうなのその頃冷え症が一番ひどくて。とにかく暖かい服着ないと死んじゃう気がして。でもそういう安富さんも『磔四日目のキリスト』みたいな風体で」

「四日目！復活できなかつたんですね三日目に」

「そうそう。ヒゲぶわーと生やして頬がゲソーツとコケて」

「その頃いろいろ大変じやつたんじやよ……」

「とにかく着るのはだいじです」

「はい、気をつけます」

そういうえば僕初めて「動く安富先生」を観たのはビデオニュース・ドットコムのネット放送（配信）の時でしたがその頃はまだフルベアードのゲリラか山賊みたいな姿でした。今はオレンジフレームのグラスを瞳に輝かせ、スペインの女物ブランドを華麗に着こなすハイレベルお洒落泥棒です。

深尾先生がスポーティな服装で颯爽と道行く姿も「フイールドワーク」と聞いて思いつく茶色いポケットのいっぱいいた探検服に登山帽のイメージではあります。

こういう姿を間近で見ると若者たちも「あつ、人文社会系の研究者もカツコイイかも！」と勘違いしてその道に進みポストがなくて困り果てるかもしません。

ホントなんとかならんのか日本の文科行政。上から下までズッタズタですよ。阪大の非常勤講師の謝礼コマ九〇分で六千円ですよ。そんな額で最前線で活躍してる社会人の有意義な話聞けると考えるのは、いくらデフレの世でも無理でしょう。

●ヤンガー

まあそんなこたさておき、踊るからには先に腹ごしらえしとくべ、ということで早めの夕食はきしめん風幅広麺。スープはハーラオ麺の時にいただいた鶏ガラ系のにインゲン・ジャガイモ・豆腐・トマト、もちろんいつものトッピングも。

つるつるモチモチして美味しかったです。
美味しかつた以外の感想無いの？

無い。

デザートは青桃。こちらの桃は青い状態で熟してあるようで、真緑で固いそれを恐る恐る皮ごと齧つてみれば、甘みは少ないながらしつかり桃の味。

さあ行きましょう、つてんでルオリンさんが着替えて出てきてピックリ。普段はいかにも「おかん」なヨレヨレのTシャツに柔道着の下みたいなズボンに前掛け掛けで首にタオル巻いてサンダル履き、これが日本からお土産に持ってきた白いブラウスと黒いパンツ、ボディコンシャスなそれをピシッと着こなし当地伝統の布靴を履くとまさに「米脂婆娘」、流行語的に「美魔女」と言うと叱られるでしょうか。先ほどの「衣装の重要性」を思い知りました。

普段はともあれ「ここ一番」ぐらいは似合う服持つてたいですねえ。でも非衣装持ちからしますと、「ここ一番服」ほど出番が少ないのでそこにお金掛けるのがもつたいたい気がして……

広場に行きますと村人たちが老いも若きも男も女もどんどん集まつてきます、自然発生的に音楽がスタートし踊れる人から踊ります。楽団はチャルメラ二本（うち一本がお兄さん）と、太太鼓を二人打ち、そして小シンバル。これだけ。しかし谷間のこの村ではすり鉢状の山に反射するのか、はたまた村人が集まつてしまえば他の音源が全く無いから響くのか、それだけで十二分にボディ・ソニック。

特にチャルメラのお二人は循環呼吸で踊りが一段落して時以外は一切休まずひたすらに吹き続けます。

そのリズムに乗せておじいちゃんもおばあちゃんも、赤ちゃんを抱えた若いおかあさんも、もちろん安富先生も深尾先生も、輪になつて踊る踊る。

僕ですか？

ビデオ＆キヤメラ担当です。

踊り苦手なんですよハードラック相手以外には。

三隊ぐらいに分かれてまして、この隊のリーダーみたいな人が居て、その人にまた上手い下手があるんです。で、どーにも収集つかなくなつたら

「ハイ終わり終わりー」

で一回りセツト。でもそれやつちゃうと村人達から

「えー……」

と不平不満が出るんですね。これもきっと村人の中ではいろいろこの人はこうあの人はああ、と評判があるんでしようね。

そんなこんなで一時間少しばかり汗を流すとみんな満足、散会になりました。太鼓は公民館の物でおかたづけ。素晴らしいですね、昼過ぎに「やるぞ」って夕方ぱつと踊れるなんて。

このネットワーク性というか、頭があつてコントロールするのではない、自発的な個々がなんとなくひゅーっと寄り集まつてくる感じ、これが心地よい。

日本だと一ヶ月前から回覧板回して神社の許可取りに行つたら「警察に許可取つてくれ」とか

言われて近隣に「当日うるさくしますすいません」と挨拶回……おえつ。

帰り際、お兄さんとご友人と共に売店前で少し昔話に花が咲き、踊つての姿撮りましたよ、とデジカメの液晶見せますと笑顔でした。たぶんこんなことは生活の一部なので、「なんで珍しがつているんだろう」とでもお思いなのかも。

「いやーしかし音楽最高でしたね、これぞスウヴィングッ！」

「……私、昔ここに滞在したあと、学会でベルリンに行く機会があつてさ」

「ほい」

「たまたまベルリン・ファイルのチケットが手に入つたので、聴きに行つたのよ」

「どうでした『精密機械』と評される世界最高峰ベルリン・ファイルは「全然ダメ。ここに聞いた後だと

「マジですか！」

「いや谷になつてゐるから音響がいいのか」

「みんなの踊りが音楽に与える影響があるんですかね」

「うーんわからぬけど、本当に素晴らしい音楽だね、これは」

「昔はここにもつと凄いチャルメラの名手が居たんだけど、その方は若くして亡くなつちやつた

の」
「へーつ……聴いてみたかつたなあ……」

クラシック・マニアにして絶対音感の持ち主・安富先生にしてその評です。僕も友人にジャズ・シンガーがいるもんですからジャズライヴ（普通の人よりは）よく聴きに行くのですが、なんでしょうね、その……なにか決定的なものが違うように思いました。

食べ物でも思ったことなのですが、うまく言葉に今でもできないのですが、なにかここの人たちは一番大切なことに触れたまま生活してて、我々、というのは日本に限らず先進国都市人ともいいますか、はそれを手放して別の何かを掴もうとして、そんなものは無いのでただ虚空でもがき続けている、そんな気がします。

僕生まれてこの方一番「よかつた」音楽ライヴ・イベントどれかつて聞かれたら「これ」って即答する。

先ほどの「貨幣経済の介入が無い」以外に無理に理由をつければもちろん参加性があるからで、なんかわたしらの「普段」はいろんなところにポツカリ穴が開いている気がしてなりません。

帰つてもまだ七時過ぎとかでしたので、そこからスイカを齧りポテチを摘みビールを煽りつつ、夜更けまでいろいろと語りました。

ちょうどこの時、のちに『トレモロされた日本』（Kindleで期間限定出版、書籍版は近日出版予定です）に結実します構想が持ち上がって、というかいつもどおり「というような本を書こうと思ってるんですが途中で止まつて……ながらさん続き書いてくれます？」

「あ、はいやつてみます」

みたいな。

やつぱり法律でテレビ放送とインターネット接続は夜七時から翌朝六時まで切れるようにしたらどうや。

たぶん日本人は忘れていた何かをたくさん思い出すよ。

いや冗談抜きでドイツだつたかが確か「閉店法」てのがあつて八時なんかで特定の業種除いて店閉めないとダメなんですよね。なんでも規制規制は窮屈だとは思うのですが、なんだかもはや、そこまでしないとダメな気もします。

さあ寝るか、と思いますと王さんがデッキチエアでジツと夜空を見つめているので

「いい五言絶句でも浮かびますか
などと軽口を叩きます

「……明日帰るんですよね」

「そうですね」

「お月様もう見れない……」

「うおつ」

北京は、そんなに……

「お月様、さよなら～～～～～～～～!!」

強く生き抜いてください……

●もう食べられない

今日は七時三〇分頃起床。ヤンガーの興奮が残っているのか何度も目を覚ました。いやビールの飲み過ぎか？

ファーファの散歩は今朝はそのへんをくるり。朝食は押出麺二回目。なんど食べてもうましこれなんとか日本でも食えないかな……

なんてのんびりしますと、いやつとのんびりしているんですが、地元TV局の独立製作チームが二人で訪ねて来られて、深尾先生中心に取材。僕も深尾先生の通訳付きというVIP待遇でインタビューされまして、なんだか恥ずかしかつたです。

ご夫婦でカメラからメモから全て取材して回つておられるそうで、でもマスメディアはどこもそうなのか、最近はいいネタ撮つても硬派な・眞面目なのはなかなか使つてもらえないんですね。中国だから政治的にどうこうというのではなく普通に、「数字取れないから」とかそういう

理由で。

世知辛いですねえ。

取材は結構長かつたので、僕らはポテチをつまんだり、生アワや棗をいただいたり、そして例の林檎・梨エキスを大量に日本に持つて帰るために梱包作業をしたり。現地のガラス瓶ですので強度が不安で、ハンドキャリーなものですからこれでもかとペーパータオル的なものでぐるぐる巻きにしました。

そんなことしてますともうお昼、棗餡入りの揚げパンに胡瓜スライス、そしてアワおかゆ、えーんドビール。もちろんセンターにはいつものトップピングが鎮座。
TVご夫妻もご一緒に。

こういうシチュエーションでは王さん、深尾先生、安富先生も、それから松永さんも、皆さん僕のためにわざわざ通訳の労を取つてくださつてまして、本当に恐縮でした。しかもみなさん学者さんですから要点だけ簡潔的確に伝えてくださつて、たいへんありがたかったです。

言葉が全くわからないというのは普通不安なのですが、この旅ではその不安を感じることがほとんどありませんでした。

一回だけ緑化山登りの時にダーツと話しかけられまして

「ア、アイキヤノツスピーチヤイニーズ」

「English, OK?」

「ヴェ、ヴェリーリルー」

「Oh... Uhnn...」

と向こうの方がどない言おうか悩んでたところに王さん来てくれて助かりました。
アイムソーリーヒゲソーリー。

NOVAでも行くかな……

もう無い。

深尾先生。

「あ大丈夫。中国語なんて、ここに一年住んだらペラペラになるから」

「あたりまえですよ！」

揚げパン超美味しかつたです。これはホントに日本の店頭でも十分売れる。棗餡つていうのが
しつとりした控え目な甘みでちょうどいいんです。プラムジャムとかあのへんを思い起こしてい

ただければ。

パンとおかゆと胡瓜つてコンビネーションとしてどうなの、とお思いかもしませんが、いや、大丈夫ですよ。

てか給食つてそうじやないですか。いまの子はどんな幸せな食生活送つてるか知りませんが、我々の頃はパン。ずっとパン。まずいパン。真ん中にパン。おかげで野菜の煮付けでもカレースープでもソフト麺焼きそばでも主食はパン。形は大型・細形・丸型と変わつても味は同じパン。たまにレーズンが入つってるだけのパン。バターはたまにでいつもはトランス脂肪酸。今思えばなんでそんなにマズイんだと理解不能なイチゴジャム。でもトランス脂肪酸よりはマシだから人気のイチゴジャム。絶望の大坂市は塗り物この三種のみ。塗りチョコとかマーマレードとかピーナツバターとか一切なし。毎日がトランス脂肪酸。副菜はクジラの唐揚げでイヤッホウ。よくわからぬ何か小さな塊がだいたい副菜。一汁一副菜一パン一牛乳。ここは刑務所？

虐待やないか!!

訴えるのは国連!? J A R O ? アグネス・チャン!?

僕四六年生まれですので昭和五二年～五八年あたり、西暦なら七〇年代後半は、こんなものでしたよ。この昼食の方が遙かにご馳走。

なんやねん日本どこが豊かやねんどこが飽食やねん子ども達にあんなもん食わせてなにが、な
にが……

しかしわたくしのインタビュー調査によると大阪市がずば抜けて酷いみたいです。

「クリスマスにはケーキが出たよ」

「揚げパン美味しかつたよねー」

「ウチ田舎だつたから月の三分の一はごはんでさー」

What? So What?

あの頃の大阪市に一体何があつたんだろう。

「食い倒れスピリッツ」を植え付けるために食い物の恨みつらみを蓄積させる英才教育かな?

ぬをおおおおおおおおおおお!

ノルウェーの刑務所つてめっちゃ環境がいいらしいのですが、なんでも犯罪者は基本的に社会
や人生に不信や不満を抱いていて、それが結局法の籠を「破つたつていいや」という自暴自棄に
つながるそうで、つまり快適な日々を送ることができて「あつ生きるつて捨てたもんじやない
な」と実感できると再犯率ガクッと落ちるんですって。

くそう。

さて列車の切符の関係で王さんが先発です。また北京で再合流予定。タールンには面倒ですが駅まで二往復してもらわねばなりません。

見送りがてら、いつもお兄さんが座っている家の畑の先端が空いていたので座つて眺めていました。

ダイナミックな谷の地形とそこに刻まれた千枚畳の人の営みよ。

こう……あたりまえのことですが視界一面に自然が見えるのは、やっぱりいいですよね。

僕は四角四面な街中住まいですので、たまに息苦しくなると長居公園に逃げ込みます。あそこは結構大きな公園ですので一応目の前一八〇度ぐらいは木々で埋め尽くすこともなんとか……最近はどんな時間帯でもくまなくおじさんおばさんが周回されてましてね……しかも華やかなスポーツウェアなどをお召しで……

瞼の裏に焼き付けておこう。

王さんも出発まで

「きれいな空気吸い込んでおきます !!」
とスーサースーサーしておられました。

夕方またファーファの散歩がてら、お兄さんに連れられて両先生と四人一匹でテクテク歩いてますとなーんと奇遇、深尾先生が昔よく遊んだ少女と一〇年ぶりぐらいの再会。ちょうど街への買い物から帰つてきたところだ、ということでお家までおじやましました。

こここのヤオトンがまたえつらい高いところにあつて、登る登る絶景絶景でもこんなとこ大変いやないの住むの！

「子供の頃は家にいる間中ずーっと井戸から水汲みしてたつて

「うわあ……」

こちらも番犬を飼つておられてファーファを見て鬪志剥き出し、ファーファの方はなんのこつちやわからんと知らん顔で僕を引つ張つて「先へ行こう！先へ行こう！」とあいからわずの大はしやぎ。二頭の犬の時ならぬキヤンキヤン声が夕刻寂しい谷間に響き渡ります。

アルバムなど見せて頂いて懐かしい懐かしいを連発する深尾先生。外国の方の家族写真見せていただくといつも思うんですけど、日本人つて写真に対してシャイですよね。海外の人みなさんだいたい笑顔満開でポーズ決めたりして写真を撮る・撮られるを楽しんでらつしやるんですけど

……つてあんまりそういう写真は家族以外に見せないだけですかね。それもシャイですけど。

姉妹でモデルっぽく背景・衣装つきで決めてる写真などもあって、とても楽しそうでした。そ

うそう韓国でも「結婚写真」はプロに依頼してシチュエーションから衣装からポーズから構図か

らドラマティックに仕立て上げ、グラビア写真集みたいに作るそうですね。

なんで日本だけあの写真館で家族固まつて表情固めて撮るアレで固定されたままなんでしょう？

いや、プリクラがあるか。しかしがプリクラではしやげるのに家族写真や結婚式写真は固まつてるとなると、それまたそこに問題が潜んでそうな気になつてくるよ？

娘さんはもとよりお母さんもスリムジーンズぴつたり履きこなすナイス・スタイルで、そりやまあ、前にも言いましたけどこの道毎日上り下りしてりやスタイル良くなりますつて。

日も暮れてきたからお暇しましようか、てなタイミングで娘さんのスマホに着信があつて、会釈しながら楽しそうにしゃべる様子が、何百年変わらない背景のヤオトンとミスマッチで、なんだかおかしかつたです。

もし僕が外国人で、京都へ来て清水寺あたりで小坊主さんがiPhone使つてたら同じように思うのでしようか。

ほぼ満月の月明かりを頼りに夜道を家路につきます。
ご当地田舎ですから、怖い話となるとい

つぱいあります。安富先生が

「昔ここで嫁が間男と共に謀して旦那を毒殺したという噂があつて」

と語りだすと深尾先生が

「もう止めて止めてそんな怖い話！」

とおっしゃるのですが先生もフィールドワーク長いものですから

「……おかしな夫婦といえば財産目当てで野獸のような女と結婚した男性が居て」

「野獸！」

「もう凄いの。発声が唸り声で普段座敷牢みたいなところに繋がれてるのね」

「そつちの話の方がよっぽど怖いわ！」

人間が一番怖いんですよ人間が。

鬼神とか幽霊とかそんなもん人間に比べりや屁でもない。

さてあとは出発を待つばかり。

もう会えないかと思うとファーファを撫でまくり、それからミイー・ミイーを弄くり倒しました。ミイー・ミイーは隣のデッキチエアの座面に乗つて眠るぐらいには慣れてくれました。

実はこの旅の一〇日ほど前に同じ茶トラのウチの猫を亡くしてまして、一四年。名前が「ミル

ク」なので「ミー」と呼んでまして、同じように目つきの悪いや銳い猫でした。手の掛かる子でね、最後二年ぐらいは口内炎になつて二週に一度ぐらい注射に行つて、間隔開けるために痛み止めの薬を、そのままで呑まないものですから練乳に混ぜて練つて舐めさせるんです。七月に夏バテか何も食べなくなつて、点滴だなんだと付きつきりで看護しまして、なんとか元気になつて前より元気になつた、と思つたらある朝心臓の血栓が大動脈を腰のあたりまで飛んで下半身動かなくなつて。ネット時代は功罪あるもので、お医者さん聞くまで調べてますと予後はもう基本的にダメなんです。暗澹たる気持ちで行きますとお医者さんの説明も同じで、とにかく血栓溶かす薬を点滴で入れますから、と預けて帰つて、また引き取りに行つて。家帰つて数時間で急変して亡くなりました。

もう長くないのわかつてんだからそのまま家に連れ帰つてやれば。帰つてから無理に薬をやろうとしたのですがあんなことしなければ。いや食べなくなつたあの時期にそつとしておいてあげれば眠るように逝けたのか。いろいろ後悔ばかりです。

そのミーちゃんが、「いいよ」ともう一度遊びに来てくれたみたいで、嬉しかつたです。ミィーミィーには長生きしてもらいたい。

お兄さんはお外がお好きで、昼も夜も庭の片隅でしゃがんで、両腕を両膝の上で組んで、その上に顎を乗せるようなスタイルで沈思黙考されている姿をよく観たのですが、この夜はそうする

お兄さんの頭上にちょうど満月があつて、なんだか本当に古代中国の哲学者って、こんな感じだつたんだろうなあ、という絵でした。

こつそり写真を一枚撮らせてもらつたのですが、人間都合いいことしか見てないものですね、端っこに洗濯物のタオルがどどーんと写つてて台無しな写真でした。

カメラ、RX100は大活躍してくれました。その写真も「手持ち夜景」モードにすると単純にシャッタースピードを遅くするのではなく（そうするとブレやすくなる）高速で感度変えながら六枚ぐらい撮つて中で合成するんですつて。

だから月夜に手持ちでそんなに気合入れずに撮つた写真がブレ無しでかつちゃんと見られる写真に。ちょっと人の目ではありえないような画になるので、不自然ではあるのですが、これもまた表現と思えば。

技術の進歩は凄いです。

なにやらヤオトン内が大盛り上がりなので顔を出しますといきなり、

「ながたさん王さんはどう？」

「はい？」

年頃（？）で独り身の男女を見ればくつつけたがるという懐かしい風は日本ではもうすっかり

見なくなりましたなあ。『見合ババア』『仲人ジジイ』て存在が親戚に一人はいたものですが。なんだか深尾先生が

「話をまとめるというのは両方に『あの人あなたに氣があるみたいよ』と吹き込んで状況を動き出すように持つて行つてこそよ!」とルオリンさんに説教されました。知恵さんも笑つてました。お二人は恋愛結婚だったそうですね。

いや、僕は文学が恋人みたいなもんですかゴフツ・ゴフゴフツいかん持病の結核が。

夜一〇時半、タールン号で出発。名残惜しい感動の別れのシーンではなく割とあつさりしていたのは、両先生もちろんまた来年来るからで。

僕はどうでしょう、また来る機会があるのでしょうか。

「とても楽しかったです」みたいな中国語を直前にアンチヨコ引いて覚えたのですが、結局「再見（ザイチエン）」「謝謝」を繰り返すばかりでした。

タールン号は山道を出て高速を飛ばします。ここはずいぶん田舎になると思うのですが、立派なピカピカの高速が通つてました。

都会の富を田舎に公共事業の形で回して配分するのが日本の誇る田中（角栄）システムだとするなら、いまその真つ最中という感じです。すぐあとで車窓からの風景でも田舎街にバンバンおつ立つ高層ビル、を嫌とというほど観ました。

「中国バブルは崩壊する崩壊する」詐欺で小銭稼いでる方おられますか、田中システム回しているならあと一〇年ぐらいは開発する余力があるようにも思います。

（收拾できない内乱などの政治マターは別）

ただ、そのあと日本がそうなつたように反動というか停滞が来て、その時は日本よりもさらに急峻で過激なものが来ると思われますので、どんな余波が日本をいや世界を覆うのか、不安は不安ですね。僕まだたぶん生きてますから、それを目の当たりにすると思います。

まあその前に人工光合成でも実用化されてエネルギーも食料を奪い合わなくていい、いつでもパパイヤもいで食べられる南の国のハメハメハ太王的世界が実現されればいいんですが。

駅に着き、大活躍のタールン氏と別れて、駅舎に入るのにもパスポート&荷物X線チェック。日本に居るとあまり話題にならない（されない）のですが中国は国内でちつちつや暴動やテロ

的なものが四六時中起きているそうで、もちろんこれもテロ対策でしょう。

待合室はとても広いのですが日本の、どんな辺鄙な駅でも隙間さえあれば自販機を押し込む式ではなく売店も先日見た外側の一店だけのようで、もちろんのようにコインロッカー的なものも無く、シンプル極まりない。ただ駅舎そのものは新しくて電光掲示板も最新とまではいかぬでも三色LED世代でもちろん完動してました。

○○一九発の寝台車、入線・発車定刻どおり。

切符は紙式を車両に乗る際に係員さんにプラスチックカードと交換してもらう方式です（降りる前にまた元の紙に交換）

寝台は三段が進行方向直角に対面で並ぶ六人ユニットが一区画。なので狭い間の空間は長距離客ならではのトランクその他で文字通り足の踏み場も無くなるほどです。

ここか、とカードに記された寝台を見れば寝具は乱れ、小テーブルには空きペットボトルとおやつのひまわりの種（これは中国のおやつの定番。アメリカでもよく観るのですがなぜか日本でだけ定着しませんね。落花生あれだけ好きなんだから別に殻付きが障害だとも思えないですが）の殻が散乱……一応お掃除は来られるのですが「ゴミありませんか」式でのかいのだけ取つててくれる程度で、つまりこの……

シーツと枕あつたかい……

なんか嗅いだこと無い匂いするんですけど……

ただわたしライフヒストリ的に「よくわからないところで寝る」のに慣れてましてこのぐらいなら平気です。若かりし頃は大垣夜行も乗つたものさ。横になれるだけ幸せ。

ただ、神経質な方には……つてそんな人そもそも外国で寝台車とか選びませんよ・ねー。オリエント急行でもなきや。

寝台車内、一応禁煙ではあるのですがデッキOKで、車両間扉も新幹線のような自動でも無ければナチュラルオートクローザー的仕掛けがあるわけでも無く開けたら開けっ放し、タバコの苦手な深尾先生が一晩中

「もう乗らん!!」

と激怒。

で、安富先生も起き出してて、「老子と数学の関係について」なんて難しい本を読みつつデッキからの煙の流入を防ぐためドアマンと化しており先生寝ないんですかと問えば

「線路が悪い……」

と苦り切った顔。確かに時折、「ガーン!」とえらい音がしてそことこのショックが来るんです。僕はガースカ寝てたのですが、確かに考えてみれば日本で鉄道車両に乗つてて「ガーン!」とショックが来る、なんてことは事故以外のシチュエーションではありえず、衝撃そのものより不安

で飛び起きるのも理にかなりますね。

昔のことを語つてくださったところ、社会主義国時代の線路は丁寧に作られていたからか、また車速もおそらく六〇キロ程度で非常に乗り心地がよく、当時不眠に悩まされていた先生も「この列車に乗るとぐっすり睡れる」ほどだつたとか。

時間はかかるがそれが列車旅の風情つてもんですよね。

その頃頻繁に利用した列車で、食堂車のコックの丁さんと仲良くなつたりしますと、その丁さん当然鉄道員で切符の手配に奔走してくれたり、例の婚礼イベントの時にはわざわざ駆け付けてくれたりしたそうです。システムがゆるくてボコボコ穴が開いてる部分を人間が埋める、本来はそのぐらいが心地よい社会なのかもしれません。

だつてスタバとかだつてあれ同じ味がする自販機が並んでて同じ内装の椅子机があつて店員居なければ、そんなに居心地が……

……いやあひよつとすると流行るかもしらんなそのお店日本じや……

このT42という列車は山西省を突つ切つて西から東へ北京めがけて走るのですが、寝込む前に暗い車窓を見ますと先程も申しましたがどう考えても何もない山間部に突然巨大な（豪華ではなく）駅舎が出現しその周りにわけがわからぬほどの高層ビルがおつ立つかおつ立てられつつ

あり、

「先生あの街はどういう街なんですか」

「まあ炭鉱とか……あと不動産投資」

「こんなとこ、つてつたら失礼ですけど、だつて何も無いじゃないですか」

「バブルの時日本も同じだつたでしょう」

「ああ」

チバリーヒルズ、懐かしいですね。

トマムリゾートのマンションを殴り合つて買つたりね。

お金は回そうと思えば回るんですよ、人夫雇つて穴掘つて土山作つてそれを飾つて、またそれ取り外して燃やして土山崩して穴を埋めて……を繰り返せば。ただその元になるお金をどつから持つてくんですか、つてだけで。

もちろん未来から先借りしてるわけです。
おそろしい話です。

出掛けに両先生の指示でありつたけの水ペットボトルをボストンとリュックに詰め込んできたのが功を奏しました、元々乾燥してゐる上に車両内はさらにカラカラで、夜中寝ぼけながら枕元べットボトルをぐびぐびやること二度ほど。

もちろん寝台ですから車内販売などありませんし車両内自販機など夢のまた夢。
海外で長距離列車乗る時のお約束ごとかもりせませんが、ここに記して注意を喚起。

●北京点描

六時頃目を覚まして北京に近づくと山あいから平地、そう中原を燎原をひた走る感じになつてそれにともなつて車窓の風景も東海道新幹線で静岡とかのあるあたりを走つている感じに。

若い『三国志』ファンの方には残念ですね、もうあと二〇年早ければあの頃の雰囲気もだいぶ残つてロマンに酔えたんだろうと思いますが、いま静岡です。

時間もあるしつつことで安富先生と例の「現代日本の政治経済についての本」の打ち合わせなど。

しかし本当に安富先生は博覧強記で、「あれがこうであるときこうであるのにこんなこと書いてあつてあの人はこう考えて……」と授業を持てば第一回目には立錐の余地もない超人気東大教授の講義独り占めという感じの贅沢タイムでした。

まとめるのが大変。

ある時webに「大人のADHDチェック」てのがあります二〇の質問に応えてあなたの注意

欠陥・多動性障害度を計りますてものなんですけど

「あれやりました?」

「やりました、僕二五もあつて真っ青」

「私フルマーク!」

「スゲー!!」

あれ近年病気扱いされてますけど上手く活用すると東大教授になれますよ。

先生がよくおっしゃる「東大の恐ろしさ」の例で、試験をしますと授業に全く来てない生徒が（参考書として示しておいた先生の著書などを読み込んで）満点完璧な答案を書いてくるそうです。

そんなことは原理的にありえない。一人の人間の思想を聞かされれば、頷くところもあればよくわからないところもあり、また自分の考えと違うところもあって、それらを呻吟しながらまとめてようとするのが人文系の試験答案のはずであり、つまり「満点」の解答が書けるというのは自分の感覚や感情をいったん止め、安富歩になりきつて思考の道筋を辿り直してそれを書き留める、という憑依現象のようなキモチワリイ所業なのです。

しかし「それがいい」とされる教育受けてきたんだからそうなりますわな。

最近はだいぶ「それじゃマズインじやないか」という振り戻しもあるそうですが、そういう真

つ当な若者は相変わらず東大には来ない。

そんなことを聞いてますと、乗客の携帯テレビのニュースが漏れ聞こえ、新聞も売りにこられるので覗きます。「我らの海に日本の護衛艦が殴りこみに来た！」という一面で、後ほど日本でチエックしましたがなんの話題にもなつてなかつたので、たぶん^てつち上げとまでは言ひませんがリアルタイムなファクトを伝えたわけではなく資料映像使つた特集記事の類だつたのでしよう。ま日本でもよくやりますけど。

でもその新聞を持つてきてくれた車掌さんなんだか売り子さんなんだかな若い女性は、我々がジヤパニーズだと見て取つて「ニホンゴ、スコシダケ。イツテミタイデス」とお愛想を言つてくれまして、これこのように日中双方で「普通の人」の感覚というのは「ああまたやつとるわ」になりつつあるのかなあ、とも思います。

僕世界史的に明るいニュースだなと思ひましたのは例のシリア武力介入の時にオバミンがまた発狂して（あの人ヒステリーですよね、頑張つて抑えますけど）
「ブッ潰す！」

言い出しましたらイラク戦争の時そのノリで超痛い目に遭つたイギリス人達が激怒してそれぞれの下院議員「いいかげんにしろ！」と突き上げてそれにキャメロンが腰を抜かして早々に

「いや今回ウチはちょっと

とベタ降りして、あそこからダダ崩れになりましたよね。

あれつてとてもいいことだつたと思うんです。（シリアにどう対応するかは別にして、意思決定として）

結局「わたし」ひとりひとりが選挙区の議員に脅しかけるしか無いですよ。

「落とすぞ」と。

小選挙区制つてぐわんぐわん政権つまり政策がスイングするので日本には向いてないんじゃないとかという議論もありますが、どんなシステムも慣れてしまえば有効活用の仕方がわかってくるつてもんとして。

尖閣の時もあれプロのアジアウオツチャーナラ「あああのぐらいは」みたいな普通の話らしくて、中国対韓国だと漁民同士が刀振り回して殺し合いするそうです。
もちろん体当たりがええことではないですが、そう聞くと「位置づけ」ができますでしょう。「そのぐらいか」という。

最近のマスメディアはジャーナリズムを完全に放棄しているので、自分で情報集めないといけない。なんとなれば先にも述べましたが「だいじな何かがぽつかり落ちた情報」つてそれ情報ではない。意味も価値もない。判断を間違う、逆にしてしまう恐れがありますから。そんなものを脳に心に入れるのはむしろ有害です。

超めんどくさい世の中です。

中国に限らず世界中に友達を作つて、肌触りのある感覚とか言葉とか、そういうものをできるだけ知つていきたいものです。

とかなんとか考えてますと○八三〇定刻に北京西駅着。東アジア人は基本的に「鉄道」が好きなんじやないかなあ。

北京西駅は巨大な駅舎の上に巨大な歴史建造物を模した楼閣が中央・左右と建つており、なかなか異様ながら威容です。

また文句ばっかり言うようですが京都駅はあれなんとかならんかつたもんなんですかねえ。品川駅や大阪駅はあんなもんでええと思いますけど、京都ぐらいはこう……大仏型してるとか。それは奈良か。

あれ京都人にまかせたらあかんのですよあの人ら八〇〇年前の建物に住んでるので、数十年で取り壊すのがわかりきつてるコンクリの建物とかなんの興味もないんで、あんなガラクタでいいんです、っていうかむしろサステナブルでない以上ガラクタの方が潔い、とかそういうメンタルがあるんですよあの街の人々は。

まだからつて東京の人に任せたらイラクの建築事務所に丸投げしてキモくて高価なもの造ら

れるだけなんでどうにもなんないんですけどね。

なんか街に帰つてくると心がささくれ立ちますよ。

悪いのはこの灰色の空氣だな。

涙目でマスクしながらタクシー乗り場に向かうと高架下みたいないかにも排ガス籠もりそな
ところにあつてさらに涙目で待つ。列は長いものの配車も多いので二〇分は待たなかつたかも。

先日一緒にお食事した夏明方先生の超豪華マンションにお邪魔してシャワーとスイカをいただ
いて人心地つかせてもらいました。一〇年前無理して三〇〇万で買ったマンションが今や三〇〇
〇万だそうで、

「売つたらええですやん！」

「住むところ無いヨー（笑）」

とのこと。バブルですなあ。

先日泊まりましたホテル同様、西洋式の、ベッドルーム奥にそれぞれバスルームがあるタイプ
です。北京では高級邸宅はこうなるようです。日本人だと二世帯住宅でもなければきっとひとつ
にしてでかい湯船を導入するでしょうね。

奥さんはインテリ美人で娘さんは可愛らしい中学生、高校は来年アメリカ留学！

やつぱりなんかこう、中国人はバイタリティありますなあ。なんだか「何が起きても生きていける」をまずベースに考えてる気がします。日本人はまず「何も起きない」をベースに考えるんですよね。どつちがいいとか悪いとかではないんですが。 クルマの運転そのままだわ。

深尾先生はPCを借りて、自宅にSkypeで電話。すっかりSkypeは世界飛び回る人の必須アイテムになりました。

僕の友人もイタリアに留学した時、現地でプリペイド携帯とSIM買つたけど、結局日本との通話はほぼSkypeでチャージ余らせて持つて帰つてきちゃつた、と言つてました。

お昼は夏先生ご一家と近所のショッピングセンター、これがなんと中国一巨大、すなわちユーラシア一巨大（北米大陸が含まれないところがミソ）なそれということで、日本で標準的に見られますヨーカドーとシネコンのくつづいたアレのね、ゆうに三倍ぐらいはあつた。五倍あるかもしれない。いや、駐車場が平面で週にズラーッと並んでるので「広つ」と思ったのかもしけない。とにかく向こうが霞んでました。

目指すお店は苗（ミヤオ）族の貴州料理。貴州は中国南西部にあつて少数民族の多く住む地方だそうです。

店内はその民族の伝統的な模様などで埋めつくされていて、確かに「漢族標準」ではない感じ。差別的な意味合いは全くないと前置きして韓国・日本も含めた「中華周辺圏」っぽい雰囲気、といふと怒られそうですね。

ひどい影響力だ（笑）

こちらのお店チエーン店だそうですが店員さんを現地から雇っている本物なのが売り物のひとつだそうです。

メニューは、破竹、韓国のムー（ムク）みたいな寒天的食べ物、幅広の米麺、竹筒入りのおこわ、ネギを入れたチヂミ的なたぶん小麦粉の焼き物（これ系世界中にありますね）、メインは川魚（鯉系）の少し辛いお鍋と、あひるのスープ。

「南方少数民族の」と枕言葉がつくとエスニック系をご想像されると思いますが、あもちろん北京のショッピングセンターに入つてるわけですからアレンジしてあるかもしれません、どれも香味・塩加減ともあつさりしていて食べやすかつたです。現地で食べてみたま、と思いました。締めが面白くて、豚肉の脂身で甘い餡を挟んで、それを（たぶん煮た時のソースを掛けた）ごはんの上に乗せたもので、ご当地でお祝いの時に食べるものだとか。見た目が結構パンチ効いて

るんですけど、豚肉と餡は意外に合いました。といつても「いつも食べたい！」という味わいで
はなく、祝膳というのはどこでもそういうものなのかな、とも。

食べてるとガラが溜まつていくのですが、以前は中国ではそういうのはテーブルにガンガン放置、つまり食後にテーブルが乱れている・汚れているほど盛り上がりがつたいたい宴・食事の証、という文化があつたそうです、が、最近は片付ける方向みたいですね。

日本で鍋物の時よく使われるあの銀色の金属製のガラ入れを道具屋筋で大量に仕入れて売り込んだらいかがでしょう。もちろん外国人多く来そうな店狙いで。

夏先生の学さんと、先日も来られた王さんが合流。王さんは深尾先生のリクエストに応えて
チャイナドレス。

元々あれば満州族の貴人の衣装で、スリットは乗馬の際、足が横に出せるように、そして下はズボン姿だつたそうです。それが辛亥革命後三〇年代に上海あたりでズボン無しでオシャレに着こなす風が一気に流行つて現代に至る。

ということで満州族の王さんが着るとセクシーというよりもカッコイイのです。寸胴・胴長・
低頭身の日本女性にこそ着物が似合うように。

席お隣で日本語の練習だつてんでいろいろお話したんですが、

「僕の祖母も戦争前に一時満洲行つてたんですよ、大連」

「お～大連とてもいいところですね～私も里が遼寧省なのです～」

「そうですかー。その頃は一面のコーリヤン畑とか言つてましたけど」

「昔に生まれたかつたですね～」

「あそ suchka、百年前なら貴族ですね」

「フフフフフ」

という、「前王朝の支配民族」なんて感覚はなかなか日本では味わえない。ちょっとドキッしました。

「王」は漢族に立場逆転されてから改姓したもので、元々は完顔阿骨打の「完顔」だそうです。
満州族は変換表持つてみんな「元の姓」を知つてるそうですよ。

このへんが「ニューヨークにいろんな民族集まつてる」というのとはまた違う景色です。

先日の高級店でのお茶サービスの際、深尾先生がお店の「お茶淹れセット」に一目惚れしたのですが、これどういうものかと言いますと、電気ケトルの台に注水用の蛇口が付いています。その蛇口はちょうどケトルの上に来るようになりますて、その下にチューブが長く繋がつてて、こ

れを任意のペットボトルに入れる。台にはポンプが仕込んである。これでつまり、ケトルをセツトしてボタン一つ押すと注水から沸騰まで手間いらず。

ペットボトルから直接注ぐのは格好悪いですし、さりとて日本式電気ポットのジャーツてのも風情が無い。さらに中国茶は小さな急須で何度も何度も淹れますから、ケトルをステーションに戻せば淹れてる間に次の湯がチャージされて沸いている、というのは非常に都合がいいわけです。

先生が「これいいわね！」といえば王さんが「これ安いですよ、買って来ましょうか？」ということできつてきてくださったのです。確かに日本円にすると二五〇〇円とかその程度。ステンレス製の電気ケトル付きですよ。さすがに安いですねえ。

さて満腹になつて王さんたちとは別れ、では我々は夜のワインパーティ買い出しに、おつとその前に現金をATMで、と安富先生がカードを突っ込むとそれつきりうんともすんとも言わないもちろんカードも返つてこない。

ギャーッてことで深尾先生はもちろん夏先生も奥様も銀行窓口に掛けあつて一騒動。日本でそんなことになつたらATMの後ろに控えている遊弋おばさんがすつ飛んできて平身低頭でATMに調整中の札が掛かつて赤いランプが回つてセコムが駆けつける……と思うのですが、「ちよつと待つて」と言わされて結構いつまでも放置されるなど、これはこれでなかなかドキドキしました。

昔、『パ・ボTV』で笑福亭鶴瓶さんが上岡龍太郎さんに
「君はなんでそんなオモロイことばかりにぶち当たるんや」と聞かれて確か

「いや、待ち構えてたら来るんです」

みたいなお答えをされてたと思うのですが、安富先生はなにか指先から変な電波出しておもしろトラブルを吸い寄せてると思う。

さすがに北京の街中ですからなんとかかんとか無事カードは回収、地階の巨大スーパー・マーケットに向かいます。奥様が案内を買って出てくださいました。

まず薬屋さんでおみやげの漢方薬。薬マニアの深尾先生によるとモノによつては抜群に効く薬がとても安く手に入るそうで、確かに竹かな、箆かな、のエキスを使つた花粉症（アレルギー）のお藥を買ってらっしゃいました。

僕も爆発鼻炎持ちなのでチャレンジしようかな、とも思つたのですが、最近鼻炎爆発が起きるのはつまり免疫落ちてくたびれてる時なので、爆発起きたら寝こむ方がいいわ、と方針を転換しててですね。

まあ先生方は授業もセミナーも会議もイベントもあるから「ここ止めなあかん」という必要性

が僕なんかとは段違いだと思うのですが。

「サロン・パス」売つてゐるんですよもちろん久光製薬の本物。で、そのイメージキャラクターが「小S」さんでスレンダー美女で、面白い芸名だなー、と思つたのですがよく考へると日本にも「江頭2:50」みたいな素敵芸名たくさんありますよね。

ワインは安富先生の専門。オススメは「張裕」（チャンユー）ワイン。張さんという方が調査の結果、煙台（大連の渤海湾向かい）がボルドーと気候・地質ともそつくりだと発見してそこでワイン造りを始めたそうです。ということで中国ワインの本家本元というべき存在で、実際その作品は本場欧洲……つて最近はそういう表現もしにくいですが、でも人気・評価とも高いそうです。

それをカゴに放り込んで、でりカーコーナーのお姉さんに「オススメは?」と尋ねてみるとリコメンドされたのはトップブランド、「長城」ワイン。ラベルの「GREAT WALL」の文字も誇らしげ。

あとで調べたのですが日本では宝酒造が入れてる一二〇〇円クラス一種なのですが、当然ながら北京では嫌つてほど種類ありました。じやまこれも一本、てことであとは珍しいノンアルビールとかいろいろ買って、肴はなんたつ

て北京ですから豚餃子、海老餃子、ゴマ団子など点心の冷凍食品を買い込みます。

あと亀ゼリー。

薬膳で有名な、スッポンの一種の亀の腹甲を粉にしたものに各種の生薬を混ぜ込んで固めた（元々持つてるとタンパク質が熱すると固まるそうです）もので、こちらでは非常にメジヤーで普通にザバザバ売つてるのです日本でいえば「たらみ」のフルーツゼリーぐらいの勢いで。普真つ黒です。

巨大な冷凍食品の棚がズツ・ラーツと並んでる様はちょっとアメリカみたいでした。
土地があるつていいよね。

夏先生宅に引き返し、お茶などいただきつつ一服させてもらうとちょうど時間もチエックインの頃合いだ、ということでお暇しました。ありがとうございました。とても助かりました。ここでも西瓜とお茶を山のようにいただきました。

●ダック&ワイン

タクシーの運ちゃんに（観たこと無い僕のために）「天安門の横を通つてくれ」と言いますと「混んでるからヤダ」つて。それでも無理言つて通つてもらいました。

改修中だつたのですがもちろんその足下には観光客がわんさとおり、ここであんな大事件が起きたとは信じられません。

日本で言うと皇居の周りを走つただけですのでそれで言うのもなんですが、随分と「中国」と聞いてイメージする建物や雰囲気がないのに……：

「全部ぶつ壊した」

「そうなんですか」

「あの事件は指導部にとつてもトラウマものなので、香港のデベロッパー入れてこの周り全部再開発という名の徹底した破壊を行つた」

「なんと……」

辛いこと起きた時、その時そこにあつたもの全部無くしてしまいたいのですね。

中国はいつもこんな感じで、史上何度も全土で戦乱が吹き荒れたのと、王朝変わる時に徹底し

て一からやりかえるので、歴史的建造物とかがほとんど残つてないそうです。むしろその面では日本の方がいろいろあるほどだとか。

「北京」といえば日本の文化系少年少女にはその華やかで雄大な歴史・芸術・文化をもつていまも憧れの都市のひとつであることは間違いない、と思うのですが、そのイメージを想起させてくれるものが少ないので、少し残念でした。

もちろん街歩きの時間が少なかつたのもありますが、でもロンドンでもパリでもそれこそソウルでも極端なことを言うと空港降りた瞬間からその都市の「ああこれが」という個性を感じるものですが、北京にはそれが薄いのです。

「倫敦に行くぐらいなら北京へ行きたかった」

と留学中東西の文化ギャップに悩んで下宿に引きこもつた夏目漱石が、行く前からそんな風に言つているのですが、漱石先生が今の北京見られたらどう思われるのだろう。

……でな話をしますと王傑さんに真顔で

「北京にもいいとこいつぱいありますよ！　ながたかさん知らないだけ！　今度案内します！」
と叱られました。名刺をお渡しした時、僕の名刺「ながたかずひき」と書いてあるのですから王さんはすっかり僕が「ながたか★ずひさ」だと思つてゐるのです。

ま、北京広いですかね。見えてないだけかもしだれず、またその無味無臭さこそが「世界の中心」＝中華の証かもしません。

天安門にもサンダルで行ける今日のお宿は高級飯店「MARIOTT」。もちろん今回もスイートにて、リビング・ダイニングを真ん中にベッドルーム二つ。僕（ゲスト）の方には円形ジャグジーまで。でもこれも一人頭で割ると一万いかないのよ？

夕食の準備始めるまで時間があるのでプールへ行こう！と行つてみたはいいものの、事前にプールがあると聞いてたので水着は持つて行つたのですがキヤップが要ると。買うと\$3。五秒悩んで諦めました。そこまで水泳したくないやい、フン。

皆様もプール付き高級ホテル泊まる時はご用心。

王傑さんとも再見、早速深尾先生と共に予約注文しておいた今日のメイン料理を受け取りに向かわれました。

後で聞いた話ですがこの時、昔ながらの北京名物・壺入りヨーグルトを発見、みんなで食べて舌鼓を打つたそうです。屋台などで簡便に売られているもので、日本で言うと公園売りのアイスクリンとかあのあたりになるでしょう。

それ食べてみたかつたなあ。

僕は部屋で家電格闘役。またも立ちはだかるドイツの壁シーメンス。レンジどう使うかわからんのですレンジが（笑）

物放り込んでスタートボタン押せばなんとかなるだろ、と思うでしょ？
スタートボタンが無いの。

全部そのモード（レンジとかヒーターとかコンベクションオーブンとか）を指定したボタンを押さないといけなくて、まずどれがどれかアイコンなんできつぱわからん。あたりつけても今度は時間設定がテンキーとか無くて、もちろんですがダイヤルもシーソースイッチも無くて、わかんないのとにかく!!

おで家電メーカー出身だで！？

まこれは後回しにして、IHのコンロを動かしましようかね、ということとこれがまたスタートボタンがわからない。

ハーッ！

日本の家電だとあたりまえの、「スタートボタン」とか「メインスイッチ」とかつて「これだけ押せばとにかく動く」という思想が無いんです。

結局これはボタンをポチポチ押していくと7セグ蛍光管の数字が1、2、3、4、5と上がつていって、たぶん5が最強なんだろうな、と思いますやんか。でもその次てのがあって、うろ覚えなんんですけど

「OK」

とかなんです。「High」とか「MAX」とか「FULL」とかじやなくて。ほんでその時音変わることですね明らかに。ところが日本のIHほどはパワー無いつぽくて、しばらく見ててもそれがマキシマムパワーかどうかわからんのです。じゃ、ということで無難にその手前の5になると（これがロータリーセレクトで行き過ぎると1に戻る）まったく火力が無くて、あこれは違うわ、たぶん「OK」がいいんだ……とかなんとかかんとか。

だからこのロジック、一旦覚えてしまえば日本風に、例えばウチのIHコンロで言いますと、「主電源を長押しで入れて」「使うコンロ口のスイッチを長押しで入れて」「目標火力まで>もしくは<のスイッチを押す」というステップを踏まなくでも、「ボタンを5回押す」だけで目的が達せるわけで、まあ理にかなっていると言えなくもないな……言えるかー!!

ドイツ人め……

今のメルセデスご存知ですかATのセレクターレバーがステアリングコラムからちつちやく生えているんですよ。そんなもん初見やわからんやないですか。敵のスペイに追われて通りがかつたセレブのクルマ奪つて美女と逃げる時に困るやないですか。

いいですか日本の戦車兵が精度と性能の悪い戦車のエンジンとトランスマッショニに苦労して職人芸的に操縦技術を習得している間、アメリカでは高卒の子が父親のクルマ転がすように戦車を運転できるよう、戦車の方をATにしたんですよ。

そら同盟国戦争負けますわ。

知識知恵経験暗黙知を詰め込んだ「人間」というパッケージそのものこそが国家にとつて唯一最大の資産であるという物理的真実に目をつぶる全体主義など、滅ぶほかありません。

洗濯機もまたシーメンスなんですがこれは前回の格闘の記憶が残っているのでなんとか動きました。電子レンジの下にあつたんですけどこれはホテルだからレイアウト上仕方なかったのか、それとも海外ではこんなこともあるのかしら？

ドラム式の場合乾燥機能付いてるので、入れれば乾いてでてくるわけで別に（床が濡れても丈夫なように）水周りにある必要は無いといえば無いんですけども。

とはいっても何度も試行錯誤を繰り返せばなんとなくロジックがわかつてきて、少なくともお湯を沸かしたりレンジ温めはできるようになり、冷凍の水餃子を茹で上げたり、楊家溝から持つてきたポテチを温めたり。

お仕事でＰＣに向かつていて安富先生もきつそく「張裕」と「長城」と開け比べ……

「全然違う……」

「違いますね」

もちろん「張裕」のが美味しいです。いやもう明らかにモノが違う。似た値段か若干「長城」の方が高かつたように思うのですが、

店員さんを悪く言うつもりはないのですがしかし、全世界を覆うこの「売れているもの↓いいもの」という因果関係の方向の間違いはいいかげんにしていただきたい。

(個人的には両者には因果関係どころか相関関係もないと信じるのですが、それはラディカルすぎるから横に置くとして)

糸井重里という天才コピーライターは九〇年代後半に早くもこの馬鹿さ加減に気づきました。

「いま一番売れてます」

が最強のコピーになつた時、彼は「俺の出番はもう無い」と広告の世界から半隠居し、巨人戦を観まくつたり毎日釣りに行つたりしつつ「次の策」を練つたそうな。

もちろんその頃それに気づいた「わるいやつら」は「売れているように見せかける」とことで売るというおぞましい作戦を使い出して現在でも絶賛通用中、いやむしろどんどん程度が酷くなる

一方です。

それからもう一〇年が経とうとするのですから、もうそろそろ社会的コンセンサスとして、少なくとも、「『売れているもの』が『いいもの』とは限らない」ぐらいの知恵を共有してもよろしいのではないか。

だめだ。

もう楊家溝に帰りたい。

と落ち込んでますと深尾先生と王さんがご帰還、途中合流の清華大学の王中忱先生もご一緒にあります。王先生は昔日本に留学され、岩手大学で働かれたこともあり日本語は大変お上手です。柔軟な眼差しと物腰は、「大人」という単語を思い起します。

さあパーティだー！

というところで、昔両先生がこちらのTV番組で一緒になつたというディレクター氏が登場、すぐお帰りになりましたが「来たよ」と聞けば顔だけでも出す、これぞ中国風。最近ではだいぶ無くなりつつあるそうですが、以前は「仕事なんかより友達の方が大事だろ」というきわめて常識的な判断で人々が動いていたそうです。

今は北京の渋滞のドキュメンタリーを撮つておられるそうなのですが、いちいち公安の許可が必要でなかなか捲らない、とこぼしておられました。

さてお三人さんにお持ち帰りいただいた本日の主役は北京名物・北京ダック。テイクアウト専門で人気のお店が近くにあるそうで、そちらから丸々一羽分。巻き野菜に薄餅、タレ、薬味もあり余るほどたっぷり。もちろん味の方は言うことありませんでした。皮パリッと身は味わい深く、薄餅がまたいいお味で。タレも三種類ぐらいあつてそれぞれ風味が違う。何入つてのかわからぬのですがさっぱり爽やかなのがあって、それが気に入りました。柑橘じゃないしな……なんだろう？

丸一羽なので骨も貰えます。早速王さんがスープ仕立てに……って塩がない！

旅には塩と洗剤が必要です。

安富先生が「張裕」ばっかりばっかぱか空けるので「長城」が余り氣味だつたり、日本の近現代文学にも造詣の深い（もちろん僕なんか全裸で絶叫しながら逃げ出すハイレベル）王先生のお話が大変興味深かつたり、北京人の王さんにもシーメンスの家電は理解不能らしくいちいち僕が操作したり、食後のお茶は例のマシンを使おう、と出してはみたのですがこれはペットボトルに

給水チューブ突っ込んで初めて高い威力を発揮するものでして、手頃なペットボトルが無い。てなことで普通にティーポッドで淹れていただきました。お茶請けは日本から手土産用に持つてきでなぜか余つてしまつた阪大サブレ。

またそれもよし。

楽しい時間はあつという間、夜も更け王先生を地下鉄まで送りに深尾先生・王さんと外に出ます。

で、お送りしたあと深尾先生が

「あつ、ここに『GIORDANO』がある！ 服買いましょうながたさん！」

「えーっ」

てなことで楊家溝以来の懸案が閉店間際のカジュアル衣料のお店で解決。

何十年ぶりかわからぬ着せ替え人形状態を経て買ったのはTシャツ三枚に。ポロシャツ風二枚に普通のシャツ一枚に短パン一本ズボン二本……で九〇八元（当時一万八千円）。ここはカードで、と出すと暗証番号押す機械を手渡され。

最近の海外ではカードでPINコードと言われる暗証番号入力させられることが多いそうです。キヤッショカードのそれは覚えていてもクレジットカードのは設定したことすら覚えてない方

も多いのではないでしようか。海外旅行の前には一度ご確認を。（カード会社のwebでチェックできます。忘れてたらそこから変更の手続きも可能です）

「なんだつたかなー……」と思いながらこれかな、これかな、と二回間違えてラストチャンス、まさかこれか？が通つて胸を撫で下ろしました。

折角のお二人のセレクションを無駄にするところでしたわ。

でも服選んでもらうのつていいですよね。買った服は特にシャツは色も柄も形も自分では買わなそうなものばかりでした。『GIORDANO』（ジョルダノ）は香港のブランドで世界で人気、日本にもありますが東京中心、品揃えもweb覗きますとわりと若者向け。北京のお店はもうちょい大人（僕、四〇前後）でもいけそうなスタンダードな色柄が多かつたです。値段お手頃なだけじゃなく、型紙がいいのか素材がいいのか、とても着心地のいい服です。

さてそんなことしてますと王さん帰れなくなつたので、しかし寝室は二つ、ここはレデーフアーストで、と言つたのですが頑として聞き入れて貰えず本を読みながらソファで寝ると。確かに大人が横にゴロゴロ転がれるような大ソファで、気持ちよさそうだったので強くは言わず僕も寝室へ引っ込んで円形ジャグジー。

ああ極楽……

さつぱりだけなら夏先生宅でさせてもらつたのですが、やつぱり日本人は「お湯に浸かる」と
フリーズドライ味噌汁のよう生き返りますな。

翌朝は五時起き予定、iPhoneをセットした瞬間大爆睡。寝台車の疲れがわりとあつたみたいで
す……

●嗚呼懐かしのK-X

五時に目覚ましが鳴つて眠い目擦りながら荷物パッキング、服つてかさばりますねっていうか
買ひすぎです。

私ここでボカしちやつたのが例のお茶淹れ電気ケトル、これをステーションだけ箱に詰めてケトルを流し台のところに忘れてしまったんです。前日のお茶の時に、あ、これ使わないので直しこうつてステーションだけ元の箱に戻して朝そのまま荷物に放り込んでしまい……失敗失敗。

王さんと両先生も起き出してみんな寝ぼけ眼で右往左往しながら荷物を詰めたり、王さんが北京ダック・スープを温め直してくれてそれをぐびぐび頂いたり、冷凍庫を開けて餃子の残りを王さんに押し付けて、冷蔵庫を開けると……亀ゼリー！

こういうのが得意な深尾先生以外三人は目を白黒させながら押し込みました。
薬でした。

あれですね、ウンケルとか飲んだと思えば。

植物性油脂クリームとかガムシロップとかでまろやかに……されるともつと辛いか。

よく知られた話ですが大抵の国の人々にとつて日本の朝定食で生卵をそのままサーブされるなど拷問以外の何物でもなく、そう考えるとおかしなものですね食習慣つて。

王さんは「また大阪に里帰りしてください」「北京にもゆつくり」と言い合つて別れタクシーレ北京空港に向かう。

今日の空気は朝早いこともあつてか「若干マン」という感じで、青くは無いけど空も見える。この時間でも高速は結構な流れで、降り場付近は渋滞模様。まずはチエックイン、てことで航空会社のカウンターに並んだんですがなかなか列はさばかれず特に一つ前の組が待てど暮らせど解決しない。見かねた深尾先生が口を挟むと、どうやらその人達は別の空港から振替でここで乗り継いで関空を目指すそうなのですが、荷物は北京では降ろさず別便で直接関空へ行くと。だから荷物は無いんだ、というのが係員に理解して貰えないそうです。

なんのこつちや。

そんなん別に係員的には「ああそうですか」でスルーすればいいんじやないですかね、それともチエックイン担当なりの責任ロジックつてもんがあるのでしょうか。

でそのお客さん達も「航空会社に問い合わせてくれ」などと言つてるみたいですがラチが開か

ない。

しかしそこはさすが深尾先生、ディベートと特売で鍛えた浪速主婦の「有無を言わせない力」を発揮してラッシュを掛けるとその迫力に気圧されたかしぶしぶ事態が進展しました。まくしたてるぐらいで進展する事態ならまくしたてられない前に進展させないよまつたく。

といふことで一息つきに入つたCoffeeShopで出ました

「あれは幹部の息子や」。

久しぶりのちゃんとしたコーヒーがとても美味しかったです。

やはり中国はお茶文化圏であり、珈琲文化的には日本の二〇年前みたいな感じ。ネスレのインスタント（最近名前変えたそうですね）出しときや文句ねーだろ、みたいな。高級ホテルでも。部屋置きじやなくてレストランでの朝食でも。

出国審査を終えておみやげものの屋さんをぶらぶら。おばあちゃんに扇子、あと母、弟、いつも海外土産くれる友人にネタ的なもの……が、あんまり無いんですよねえ。眞面目なグッズばかりで。紅衛兵毛語録をネタ扱いするとさすがに叱られそうだし。

パンダのマグネットと、手毬型キーホルダーと、太極拳パンダTシャツの三点を選んで好きなものから取つて行つてもらう方式にしました。キレイが無くてすいません。

とかなんとかのんびりしてたらいつのまにやら搭乗時間締め切りギリギリになっちゃって、最後に乗り込みました。よく考えれば喫茶店でものんびりしてたんで、二回ものんびりすれば時間経ちますよね。
無事定刻発、もちろんKIX行きですから機内には日本人の日本語も聞こえてきてなんだか懐かしい。

軽食はおかゆとオムレツがセレクタブル。行き同様、とても美味しかつたです。

機内では「億劫」「憑依」「偽装」「ひきこもり」についての議論。ほらあのユング心理学の四類型ありますやんか思考・感情・感覚・直観の。あれの新型みたいな感じで、いろいろ軸を切つたりベクトルを変えたりして遊んでました。きっと安富先生が理論を完成させてババーンと打ち出してくださるでしょう。

そんなこんなで閑空着。

飛行機を出てボーディング・ブリッジを歩いてる間からもう、もうアイフォーンの電源を震える手で入れて「au LTE」の輝かしい文字を見てtwitterの更新を……

ほんとうに中毒患者です。

八日分びやーーーーと出てきて苦笑。

怖い税関は（なんで怖がる）先生方にくつついていくと「大学の教員です」「どうぞー！」総スルーでした。

機内が軽食だつたこともあつてしつかり食べていくか、ということで閑空内の回転寿司屋さんに駆け込んで注文するする。

白米・鮮魚・うどん・出汁・天ぷら・ガリ・わさび・味噌そして醤油。すべてがワンドフル！

「普段食べる食べ物はなんだかんだと言つていたのに」

「めっちゃ注文してしまいますね」

人間そんなもんです。

日本食サイコー。

僕お寿司そんなにコダワリないんですけど、こうした機会にいただいてみれば確かに「日本」がたくさん詰め込まれたメニューだな、と思いました。回転なら特に文化的なものまで含めて。

僕がパリ・ロンドン八日間というはじめてのかいがいひとりたびに行つた際、伊丹に着いてまず思つたのが「うどん食べたい」でした。

関西人は出汁が産湯ですから。

外に出ると猛烈に暑い。

このモワツと蒸す感じが、この……

北摂方面のリムジンバスを待つ両先生に深々とお礼をして別れ、僕はJRの快速・普通を乗継ぎ最後はいつもなら徒歩一五分の道のりを暑さに耐え切れずタクシー使用。

自宅に辿り着いてクーラー全開、なんと心地よいことでしよう（笑）

遠い土地から帰つてくるといつも思うんですけど大阪の気候つて結構キツイですよね。なんか曰く言い難いんですけど、良くも悪くも空気の入れ替わりが毎日極端にあつて、つまり外でずっと生活してるみたいな環境の変化の激しさがあります。さつき言つたパリから帰つてきた時も、真冬一月だつたんですけど、伊丹の外出た瞬間「しばれる！」とか思いましたからね。冬の欧洲から帰つてきて、ですよ。

まあしかし住めば都です。

帰つてきた以上はうどんだつてホルモンだつて『天下一品』のラーメンだつて食べ放題。

大阪最高。

あいや『天一』は京都が本店……

というようなことが確認できたのも、長旅のおかげです。他のところを見ると、今いるところの魅力を再確認できる。これこそが旅の楽しみの最後を飾るドルチエですよ。とてもとても豊かな、中国・黄土高原（および北京）旅行でした。

■あとがき

苦心したおみやげは案の定渋い反応を引き起こし、なんばまで南海の鉄人28号で出て「蓬萊」の豚まん買って帰った方がよかつたかと後悔しました。

ウチのねえ、家族ねえ、お土産に超冷淡なんですよ昔つから。理由わかんないんスけど。

だからみんなで旅行行つたりすると僕が土産に全く興味示さないの見て「買つて帰んないの?」とか心配してくれるんですけど、買つても喜ばないんで、とも答えられないでのへラへラ笑つて誤魔化してます。

だから僕、人から旅行土産貰つたら、たとえそれがなんの興味もないものでも過剰に喜ぶことにしているんです。

その気持ちが、気持ちが嬉しいから!

それはともかく写真の整理でもするかとP Cに取り込んでサムネイル一覧を見れば、写真として美しいものはただの一枚として無く資料映像みたいなものばかり。折角のツアイス・レンズが涙で曇っています。

ごめん、RX100よ。

僕はカメラが好きなんだ、写真には興味無いんだ。

八日も日本を離れれば何か変わったことが起きてるかと思えば別にそんなことは何もなく、翌日にはいつもの散歩道を歩いていつものコーヒーショップでいつものブレンドM二五〇円を啜りながらいつものような本を読む、いつもの毎日が始まりました。

僕自身にも別に大きな変化があつたわけではありませんがしかし、ものの見方はすこしだけ、変わったような気がします。

本編にも書きましたが、僕らは神様ではないので世界全体をそのままに「見る」ことなど不可能で、どうしても狭いスポットライトを当てて見えた部分だけを見て、「そんなものか」と思っています。でも、身心どちらかあるいは両方が遠目の旅に出ると、そこからまたたく間にポツ、とライトが灯つて、普段全然知らない世界の「ある部分」が見える。

その瞬間、そこだけじゃなくて、いつも観てるところと繋いだ見てない見えてない残りの部分にも想像が結構ついて、もちろん間違ってるかもしませんが、ものの見方が変わる。
それが楽しい。

なおこの書名は、いやしくも紀行を描くなら同郷の大先輩として敬愛する司馬遼太郎先生の『街道をゆく』のような逸品を、と思いつつ筆を進めてみればいつのまにか、酒呑んで鉄道オタクつぶりを發揮してあとダラダラしてるのは内田百閒先生『阿房列車』のようになってしまったので混ぜさせていただきました。両大人に伏してお許しを乞いたい。

私の筆遣い上、大幅に戯画化して描かせていただきましたが安富先生は本当に頭がよくて（あたりまえですが）まことにオシャレな浪速のマイケル・ジャクソンであり、深尾先生は愛情と純情と感情が過剰な、四百人の卒業生に慕われる「おかあちゃん」です。両先生に誘っていただきなければこんな貴重な経験はできず、感謝の言葉を繰り返させていただきます。

王傑さん松永さん王先生夏先生はじめ旅で知り合った皆さんにも様々なお話を聞いていただきとても勉強になりました。また、言葉というコミュニケーションツールをほぼ失った僕にいつも丁寧に接していただきまして、「優しさ」とはこういうものだと改めて思いました。

それから、言わずもがなですが、ホスト・ファミリーの皆さん。知恵さん、ルオリンさん、お兄さん、ファーファとミィーミィー。

実はこのすぐあと冬、一二月末に、その知恵さんが急逝されたのです。突然の悲報でお付き

合いの長い両先生はもとより、僕も王さんも驚くばかりで言葉がありませんでした。

まだ五〇代半ば、孫も小さくこれから楽しみなことがたくさんあるタイミングで、我々やご家族より誰より、ご本人が一番悔しい、残念だ、と思われます、が、こればかりは天の思し召し。私達にはどうすることもできません。

でもあの山の上の、いつも天から光が降り注ぎ、愛する馴染みの人々を見守り、そして愛してくれた親兄弟祖父母のいるお墓で眠りにつけるのかと思うと、こんな言い方はおかしいかもしませんが、すこし羨ましいです。

でも、早いですね。

知恵さん、謝謝。また知恵さんの絶妙な味加減のお料理を、お腹いっぱい食べたかったです。
残念、一期一會。

私達はもうすこし、旅をします。

■概要

『バ街道 黄土高原をゆく』 (Kindle版)

作者 ながたかずひや

発行日 2014.1.25

mail nagata@mti.biglobe.ne.jp

web <http://rakken.net/>

twitter KazuhisaNagata

※ 文中間違いがありましたら全て僕の見・聞・覚え・調べ・書く間違いです。どうぞ容赦なくだれこ。



PowerNetwork!!

**Fool Road #1 Walking Along Loess Plateau
Powered by Kazuhisa Nagata**